
ソロモン

IKALOS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソロモン

【Nコード】

N5648K

【作者名】

IKALOS

【あらすじ】

フレッドは、5年前の戦闘で両親をなくした16歳の少年である。しかし、フレッドはある日の事件に巻き込まれ、大きな戦いに巻き込まれてゆく……

第1話

オラクル諸島、ここは13の島々に分かれており、それぞれの島で発達している技術が異なっている。

その最西端にあるアムル島では、グラン、バルカン、セパイアの3つの国が島全体を自分の領土にしようと日々戦争を繰り返していた。3つの国の国境にはさまれているナルという村がある。この村は、5年前の戦乱で3カ国同時に戦闘が行われた場所であり最大の激戦地となった場所である。ここは一時焼け野原になっていたが、村人達が自分の村に住みたいと自分自身の手で村の復興を始めたのである。

その村のはずれの高台で2人の少年が戦っていた。

「さすがフレッド、剣の腕は凄いな。しかし俺も負けはしないぜ」
赤い服を着た少年が槍を突き出した。しかし、フレッドと呼ばれた青い服の少年は剣で槍をなぎ払う。

フレッドは、ナルにすんでいる16歳の少年であり、5年前の戦乱で両親を亡くしてしまった。その後、町の復興が終わった後に、村の戦士で父の親友であったカーンと共に武器の扱い方の鍛練を行っていた。

この剣は昔、フレッドの父が使っていた大剣である。

「だけどマイクも槍の腕はすごいよ。これだったらカーンさんとだつて互角に戦えるんじゃない？」

「それは、多分無理だよ。前に何回か1対1で戦ったけどコテンパンにされたからな」

フレッドはマイクがやられているところを想像してみた……なるほど目に浮かぶな……と考えていた。

今はマイクに集中しないといけないな……と思い、ふと前を見ると目の前に槍があった。フレッドは一瞬驚きひるんだが、すんでのとこで避けた。

「なに空を見ながらニヤニヤしているんだよ。そんなに余裕があるなら俺の槍捌きぐらい簡単に見切れるだろ」

「そんなことはないよ。でもいつまでもマイクに攻撃させてると面倒なことになるからこっちから攻撃させてもらっよ」

フレッドは、マイクに向かって力任せに剣を振り下ろす。マイクはひらりとバックステップでかわす。マイクの立っていた場所からドコンという音がなった。剣を引き抜こうとするが、抜けないので剣先を見る。すると地面に食い込んでいた。

「フゝ、危ねえあんなもの食らったらひとたまりもねえよ」

「外したか、でもまだ僕の攻撃は終わってないよ」

フレッドは地面に食い込んでいる剣を引き抜き、もう一度マイクに向かって剣を振り下ろす。

またドコンという音が鳴る。2度……3度……何度も繰り返す。その度に、ドコンという音が鳴り地面に穴が開く。

そして、何度目かもう分からないぐらいの回数になっていた。

マイクは先ほどと同じように避ける。その時、避けた瞬間に妙な違和感を感じた。それは考える間も無く分かった。

妙な違和感……それは先ほどと違って隙が大きすぎるのだ。勝利を確信したマイクは地面を蹴る。

しかし数瞬後マイクの目の前に映っているのは土の色だった。一瞬何が起こったのかが理解できなかったが、すぐにフレッドの方へ向く。すると、フレッドは剣を構えて目の前に立っていた。

第2話

「マイク、どうやら僕の勝ちのようだね」

「ああ俺の負けだ……しかし、何が起こったんだ？」

「あれにつまずいたんだよ。しかしマイクがミスをするとは思ってなかったな」

フレッドは、マイクがつまずいた正体にむかって指を指す。

「あれって……俺は小石になんてつまずかないし、つまづくほどの大きな石は見えてないぜ」

マイクは振り返る。すると自分が転んだ理由に納得がいった。フレッドが開けた穴にマイクの足が引っかかっていたのである。

「今日はフレッドの勝ちか……これでフレッドの327勝324敗で3つの勝ち越しか……もう少しで追いつけると思ったんだけどな、あと3勝が追いつけねえ」

「だけどこのごろマイクはすごいよ。だって12連勝とか何回もしてるじゃん」

「それはそうだけど、最終的には全体の結果なんだから一時的の結果云々じゃないんだよ」

フレッドはうなずいてみると、マイクが別の話題を出してきたので、その話題に乗る。数分間話したあとにマイクは何かを思い出したように手を叩く。

「フレッド、そういうえば村長さんがお前のことを呼んでたぞ。なんか用があるらしいぜ」

「何でそんな大切なことを先に言わないんだ」

「いや……だってそのことをフレッドに言ったら戦いをしなかったじゃん。村長さんにもいつでもいいって言われてたしね」

「とは言ってもね……まあいいかマイク伝えてくれてありがとな」
フレッドは颯爽と坂を駆け下り村長の家に向かった。

村長の家に着くのに数分も掛からなかった。先ほどの戦いの疲れ

の影響もあり、足は棒のようになっていた。少しの間、呼吸を整えてノックをして中に入る。

「おお、フレッドかよく来たな。最近は元気でやっとなるかの」

中から出てきたのは紫色の服を着ている村長だった。フレッドはまあねと軽く答え村長に近づく。

「じいさんよ、僕に何か用があるんでしょ。用があるなら早く言つてよ」

「用じゃと、はて何のことやら……」

フレッドは強く一歩前に出る。

「マイクに用があるつて僕を呼ばせたんじゃないか。……もしかしてじいさんボケたのか？」

フレッドは、村長が怒るのかと思っていた。しかし、顔を見ると苦笑いをしているようだった。

「悪いなフレッド、ちよつとばかしからかっていただけじゃ」

「なんだ……心配したじゃないですか、で用とは何ですか」

「うむ、それはの、カルトという村に行つて武器を貰つてきて欲しいのじゃが、やつてくれるかの」

「分かったよ。で、いつ出発すればいいんだ？」

「明朝に出発すれば4日後ぐらいには着くだろう」

「分かった。でだ、ミツバはどうするんだ？」

ミツバとはフレッドの幼馴染である。いつもフレッドがどこかに出かけるたびに着いてくるのである。

「今回はバルカンの領地を通るからフレッド、お前さんの意志で決めるのじゃぞ」

「分かつてるさそんなこと」

フレッドは腕を組んで考え込む。2分……3分……長い時間沈黙が続く。沈黙を破つたのは村長だった。

「まあ、今答えが出せるもんじゃないからの。明日の朝にまでに答えを出してくれよ。頼んだぞ」

「分かったよ。明日までには答えを出しとくよ」

第3話

フレッドはそう言い残すと、自分の家に帰っていった。その日は日が沈むまですつと考え込んでいた。そして、日が明け次の日、村の出口にフレッドは立っていた。その隣にはミツバが立っている。

「じゃあ、じいさん行ってくるよ」

「おお、気をつけるのじゃぞ」

「うん、武器を貰ったらすぐに帰ってくるよ」

フレッドはそう言うのと村長に背を向け、カルトに続く道へと出発した。

「村長さんまたねー」

ミツバもフレッドの後を追いかけるのであった。

歩き続け、陽が傾き始めたときバルカンの最大の貿易地ケイロンという港町に着いた。中に入ると人がにぎわっていた。

「さすがバルカン最大の貿易地、ナルとは違うね。ねえフレッドなんか見に行こうよ。面白いものがあるかもしれないからさ」

隣でミツバが叫ぶ。しかし、フレッドはちよつと違和感を感じた。それは兵士が多いことである。

「ミツバ、なんか兵士が多いように思えない？」

「そういえばそうね……だけどバルカンだからじゃない？」

「そうかもしれないね。ミツバまずは宿を取ってから見に行こうよ」
「わかったわじゃあ宿屋に行きましょう」

宿屋に着くと人で混み合っていた。列の最後尾に並ぶ。数分後、前にあった列も消え自分の番になっていた。

「部屋を1つお願いします」

「分かりました。よかったですね。余ってる部屋があと二つだったんですよ。であなたたちもパレードを見に来たんですか」

「パレードってなんですか？」

「ああそれはな、バルカン国王グルト様がこの島の北にあるカレス

という国と同盟を結んで無事に帰国してきたお祝いですよ。それなのでこんなに人がいるのですよ」

「それで兵士が多かったというわけですね」

「そうです。それであなたたちの部屋は一番奥の左側です。パレードは日の沈むころに始まりますよ」

「そうですか、ありがとうございます」

フレッド達は自分たちの部屋に行き腰を降ろす。窓を開けると潮の香りがした。それに続き人々の声が聞こえてくる。しばらく眺めていると後ろからミツバに声をかけられた。

第4話

「フレッド、早く見に行こうよ」

フレッドはミツバの言ってたことを思い出す。

（そんなことも言ってたな……）

フレッドは荷物を持って立つ。

「行くか、でも買うお金なんて無いから見るだけだよ」

そう言つと、ミツバは荷物から財布らしきものを取り出し、こつちを見る。

「自分のお金ならいいんだよね」

「まあね、でもそのお金どうしたの？」

「どうしたのって、家の手伝いとかをして、親から貰ったものだよ」
「へえー、じゃ行きますか」

フレッド達は港に向かった。港に着くまでには数分もかからなかった。

「フレッド見て、このアクセサリ可愛いよ」

「フレッド、こつちのも可愛いから来てよ」

と、フレッドは振り回せればなしだった。そんなこんなであったという間に時間は過ぎた。そして夜、パレードが始まったのである。パレードの出発地は港だったので、フレッド達は開けた高台に移動する。ミツバの——近くで見ようよ——という忠告を聞かずに……高台を探す間、何度も人にぶつかった。そしてフレッドはふと思う。

（やっぱり国王のパレードにもなるとこんなに人でごったがえすのか……）

そしてやっとパレードが見れるような開けた高台を見つけた。フレッドは高台に向かって走る。後ろからミツバも追ってくる。高台に着くのに数分もかからなかった。

「フレッド見て、パレードがよく見えるよ。近くだとあんなに混ん

でるからここにきて正解だったね」

隣でミツバが声を上げる。フレッドもパレードを見て、昔のことを思い出す。そう……あれは……

5年前の夏、父の死ぬちよつと前の話である。ナルはその時、セパイアの領地となっていた。父はセパイア軍の傭兵として、帝国との戦いに参加していた。

その日は、帝国軍との戦いに勝利したので、セパイアの首都ポツドでパレードが行われていた。父は、帝国の名高い将を一騎打ちの末に捕らえたらしく、セパイアの一員としてパレードに参加していた。その時は、大きな戦いだったのでみんなが集まっていた。そのため、近くで見れなかった。フレッドは、母に連れられパレードを見るため高台に来ていた……そしてその後、悲劇は起こった。このパレードを狙ってバルカン軍が奇襲をしてきたのである。

フレッドと母は帝国軍から身を隠すために、帝国軍の来てない逆の方向から逃げようとしていた。しかし、パレードだったため敵の思惑通り混乱し、パレードに来てた人は逃げ惑う。

第5話

フレッド達も逃げようと坂道に向かうが、降りようとした時、坂の下にバルカン軍が来ていた。バルカン軍に見つかったら殺される。と思ったフレッドは母と一緒に近くの民家に逃げる。バルカン兵の気配が消えたので、母はバルカン軍が来てないか確かめに行った。しかし、少し経っても母は帰ってこなかった。その代わりに聞こえるのは、剣のぶつかる音。フレッドはその音が止むまでの時間がとてもとても長く感じた。

数分後、剣の音も止み、外に出ると無数の死体が転がっていた。母がいないように祈りながら死体を見渡す。しかしその中には、母の亡骸も混ざっていた。その光景を見たフレッドは、母の前に座り泣いた。周りの状況も気にせずに……しかし、泣いている途中で、後ろから生暖かいものがかかってきた。後ろを振り向くと、父の姿があった。しかし、肩には剣で斬られた跡があった。父の目の前には、力尽きて倒れているバルカン兵の姿があった。

「フレッド、大丈夫だったか」

父は振り返り力強く言う。

「うん……で、でも……母さんが……母さんが……」

フレッドは母のなきがらの方向に指を指す。父は母に近づき、そっと持ち上げる。

「フレッド、1回ナルに帰るぞ。ここにいるバルカン兵はあらかた片付いたし、こいつの墓も作ってやらないといけないしな」

そして、フレッド達はナルに戻れたのだが、その時受けた傷が元で数週間後なくなったのである。

そんなことを思い出していると、後ろから槍のようなもので突かれる感覚がした。なので、後ろを振り返ってみたら、バルカン兵20人ほどと将2人に囲まれていた。そのうち背の大きい将が叫ぶ。「貴様、ここで何をしている。ここは神聖なる神殿の入り口だぞ」

強く足を踏み出してくる。フレッドは、数瞬驚いたが、理由を言う。

「パレードを見たいんですが、下は混んでて見にくかったです。なので、ここから見ていました」

そう言つと、後ろにいる将が叫ぶ。

「そういう理由にして、この神殿に忍び込むつもりだったんだろ」
そう言い、前に出てくる。

「い、いや……そんな、り、理由……じゃありません」
「なぜ、今声が小さくな……」

大きい将に——おい、リクそこまでにしとけよ——と、止められた。しかし、不満があつたのかしぶしぶ止める。

「すまなかつたな、こちらのリクが脅しまがいのことをして……」
遠くから俺は脅しなんてしていないという声が聞こえる。

「あいつの事はほつといていいからな。私はバルカン騎士団長シード、そしてあいつが副団長のリクだ」

「シードさんお騒がせしてすみませんでした」

フレッドは、頭を下げる。ふと、頭を下げるときに横を見ると、ミツバも頭を下げていた。

「いやそんなことはしなくていいよ。それと、今日のパレードまでならここにいていいぞ」

「そうですか、ありがとうございます」

「いやこちらもしクがやらかしたからな、そのお詫びだと思つてくれ」

そういつと、シード達は戻つていった。フレッドは、シードに——礼し、パレードを見る。

第6話

そして、パレードも終わり次の日。フレッド達はカルトに向かつて出発した。途中には、ブラスという町でパレードをやっているのが見えたが、先を急ぐためブラスによる事を諦めた。

そして、3日後フレッド達は、無事にカルトまで着いた。カルトはバルカンとセパイアの国境付近にある村である。着いたのはいいが、武器屋の場所が分からない。町の人に聞こうとするが、町に人影がない。どうしたのかと思い町中を探す。しかし、まるっきり、人が途絶えたように人影がない。

「ねえフレッド、何で人がいないの？」

「分からない。だけど、バルカン軍に攻められたことではないと思うよ」

「なんで？」

ミツバは首をかしげる。

「パレードのすぐ後に軍を出せる状況じゃないからね」

「ふーん、そうなんだ、よく考えればそうだよな」

ミツバは辺りを見渡すと、人影がある家を発見したらしく、大声で叫ぶ。

「すいませーん、誰かいませんか」

すると、中から人が出てきた。

「なんだ、騒がしいな。もうちょっと静かにできないのか」

中から出てきたのは上から下まで黒いスズに包まれた人だった。

「あの……すみません……この村にある武器屋の場所を教えてくださいんですが」

その男は、親指を自分の家に向けた。

「ここが武器屋だ、で、何のようだ」

「ナルの村長からここに来て、武器を貰うように言われて来たんです」

「そうだったのか、もうすぐ出来上がるからちよつと中に入って待っててくれ」

フレッド達は、男についていき武器屋の中に入る。フレッドはそこで気になってた質問を聞く。

「あの、すみません」

「ん、なんだ、どうした」

「何でこの村には人がいないんですか？」

「いないんじゃない。裏にある鉱山にみんな行ってるだけだ」

「そうですか、なら安心しました」

「そうか、もうすぐできるから、待つてくれよ」

その時、フレッド達は外が騒がしいのに気がついた。フレッドは外に出てみると、奥の山から人がくるのが見えた。

「本当ですね。山から人がぞろぞろ降りてくる」

すると、中から声が聞こえてきた。

「この村は、山で採れた鉱石を交易品として売って栄えているんだぜ」

「へえー、そうなんですか」

フレッドは中に入って話の続きを聞くことにした。

第7話

「昔は、バルカン軍が押し寄せたりして大変だったんだが、今はセパイアの領地になったからうかつに手が出せなくなっただよ」

「そうなんですか。昔は大変だったんですね」

「まったく。自分のみを守るのにも一苦労したからな」

話していると、男はこちらを向く。

「出来上がったぞ、ほら、ちゃんと渡すんだぞ」

「ありがとうございます。……」

フレッドは言葉がとまる。その理由を察したらしく、言葉が続ける。

「そういえば、お前らは俺の名前を知らなかったな。俺の名前はシッドだ」

フレッドは、言い直す。

「ありがとうございます、シッドさん」

「これからも、俺の武器屋をよろしくなと伝えといてくれ」

「はい分かりました。ではこれで失礼します」

フレッド達は外に出ると、村の入り口のほうから悲鳴が聞こえてきた。フレッドは、ミツバの手を引き、入り口に向かう。そこには、悲惨な光景があった。

村人が3人、剣に斬られたような跡があり、亡骸と化しているのである。その目の前には、バルカン兵7人が立っていた。

悲惨な光景を見てフレッドは息を呑む。その時バルカン兵の1人がフレッド達を見つける。フレッド達はすぐ隠れたが、隊長に報告したらしくこちらに向かってくる。

あきらめて、バルカン兵の前に出ると、4人に囲まれていた。フレッドは、残りの3人はどうしたのかが気になって仕方がない。

「お前ら、早く氷鉱石を出せ」

「なんですか、それ」

「とぼけるんじゃない、この村の交易品だろ。それともあいつらみたいになりたいのか？」

1人はさつき殺した村人を指差す。そして残りのバルカン兵は剣を抜く。それを見たフレッドも剣を抜き言い放つ。

「なぜバルカン兵は、罪も無い人たちを殺すんですか」
そして後ろを振り返る。

「ミツバはちよつと下がってて」

フレッドは、バルカン兵に向き直る。すると、隊長らしき声を上げる。

「なぜなら、それがグルト様の望みである。島統一のためだからだ」
隊長はフレッドに向かって、剣を振る。フレッドは数歩下がって避け、反撃しようとするが、バルカン兵の第二波、第三波の攻撃を避けるだけで精一杯で反撃する余地も無い。

第8話

「どうした。今氷鉱石を出せば、許してやろう」

しかし言い終わった後、隊長は悲鳴を上げて倒れる。隊長の方向を見ると、1人の男が立っていた。その足元には隊長の亡骸があった。

「貴様……隊長に何をした」

バルカン兵の一人が叫ぶ。しかし、男はバルカン兵に向かって剣を振る。そして言い放つ。

「お前らの悪事を見過ごせないから殺したとでも言っておこう」

そして向き直り一瞬で残り2人を斬り捨てた。

「大丈夫だったか？これで、今日来たバルカン兵は全員殺したから安心しろ」

「助けていただきありがとうございます。僕はフレッド、そして、あそこにいるのがミツバです」

「そうか、俺はレクシオン、で……」

レクシオンは周りを見渡す。すると、誰かを見つけたらしく手招きをする。フレッドはそっちの方向を見ると、誰かが走って来るのが見えた。レクシオンは話を続ける。

「で、あそこで走ってきてるのが、シーザーだ」

レクシオンが説明を終えるとシーザーが来た。

「遅れてすまない、ちょっと向こうに強い奴がいてな。そいつにてこずっちまった」

「分かった。じゃあ、出発するか」

「あの……すみません。出発するってどこにですか？」

「俺たちは、セパイアの使者としてグランに同盟を申し込みにいくんだ」

「そうですか……あの途中まで僕たち付いていっていいですか？」

「途中ってどこまでだ？」

「ナルまでです。多分通り道だと思うんですが……」

「そういえばそうだな……なら、付いてきてもいいぜ」

「ありがとうございます。それで出発はいつですか？」

レクシオンは空を見上げる。いつの間にか陽は沈みかけていた。

「今から……とても言いたいんだが夜道は危ないからな……それじ

ゃあ、明朝出発ということでの場所集合な」

レクシオン達はそういい残すと、向こうに去っていった。それを見てミツバが言う。そして今は、武器の手入れをしているところである。

「一回、シッドさんの所に戻ってみるしかないね」

フレッド達は、シッドの所に向かった。

第9話

「おう、どうした。てつきり、もう行っただのかと思ってたんだが」
先ほど、フレッドはシッドに頼みを言うとおつさり承諾してくれたのである。

「ところで、さっき外が騒がしかったが何か知ってるか？」

「はい……さっき、バルカン兵数人が氷鉱石を目的にして、押し寄せてきたんですよ。それをレクシオンという人が倒したんですよ」

「レクシオンって……あのレクシオンか？」

「なんか、セパイアからの使者とか言っていましたか」

「やっぱりあのレクシオンか」

「あのレクシオン……とか言ってますがなんなんですかあの人の？」

「ああ、あの方はセパイア軍で3本の指に入る将なんだよ」

「そうなんですか。だからあんなに戦闘がうまかったんですね」

「倒したって見たのか、レクシオンの戦闘を」

「さっき言いましたよ。バルカン兵をレクシオンという人が倒したって」

「そうだったのか、すまんレクシオンが来たってところしか聞いてなかったぜ」

「じゃあ、シーザーっていう人はどうなんですか？」

「シーザーも来てるのか。それはすごいな」

「あの……だからそのシーザーっていう人は誰なんですか」

「ああすまん、シーザーっていうのは、セパイアトップの戦略家なんだ」

シッドは、フレッドの方向に向き直った。

「レクシオンとシーザーがそろってどこに行くんだ？見当も付かん」

「グランに同盟を申し込むらしいですよ」

「なんだって、グランと同盟を申し込むだと」

「はい、そうですが……」

「あの噂は本当だったのか、これから忙しくなるぜ」

「あの噂って何ですか？」

フレッドは、噂のことが気になってしょうがない。

「ああ、巷で噂になっていたのだが、セパイアがバルカンに対して宣戦布告する。という噂が流れていてな。ここは、バルカンの領地に近いから、こゝらで戦闘が起るとか言われていたんだ。私にとつては嬉しい事でもあるがな」

フレッドはそのことを疑問に思う。

「なぜですか？家は燃えるかもしれませんが、さっきみたいに略奪があるかもしれないですよ？」

「それが一番正しい。でも、戦場から近いという事は、武器の発注も多く来るからな」

「なるほど……輸送費が掛からないからですね」

「だから、私にとつては千載一遇のチャンスなんだよ」

「そうなんですか……だからレクシオンとシーザーっていう人が来たって言ったら驚いていたんですね」

シッドは武器の手入れをまた始める。

第10話

「ああ、そうだ。しかも、グランと同盟を結ぶとは思ってなかったからな。そっちでも驚いているんだ」

「そうですか……でもなんで驚いているのですか？　だって、バルカンを倒すには協力したほうがいいじゃないですか」

「今のところはな、でも後々にこの島を支配しようとセパイア、グランが激突すると俺は踏んでいる」

ここでミツバが口を挟む。

「何ですか？　じゃあ、同盟なんて意味がないじゃない」

「しかし同盟を結ばなきゃバルカンは倒せないと踏んだんだろ」

「ところで、なぜセパイアとグランが戦うと思うのですか」

「ああ、それはな……この島に、二つ以上の国が寄り添って暮らしているのが間違っているからだ」

「何ですって。戦いが無ければ一番いいじゃない」

「だけど、考えてみる。今は平和に暮らしていけるかも知れねえが、次の世代、いやもっと先の世代でこのまま平和が続くとも思おうか？」

「いえ、分かりません。でも途中で、島を独占しようとする奴が出てくると思います」

「だろ。しかも先の時代だ。技術がとんでもなく発達し、一瞬で何万人もの人を殺せる時代かもしれねえんだ。なら今決着つけたほうがいいと思わないか？」

「で……でも……」

その先の言葉を言う前に、シッドが割り込んでくる。

「もうすぐ寝ろ。明日は早いんだろ？」

フレッドは周りを見渡す。すると、周りにはもう闇の静寂に包まれていた。

「な、もう時間も遅いんだ。じゃあ明日起こしに行くから安心して

「寝ろよ」

「分かりました。では」

フレッド達は、借りた部屋に行きベッドに横たわる。眠りに就いたのはそれからすぐのことであった。

夜、フレッドはドア越しに聞こえる音で目が覚めた。フレッドは、少しボォーとしてる。すると、扉の向こうから声が聞こえた。

「……だな……。今日は何しに来た？」

「……だよ。それで、ついでに……を……に来たんですよ」
所々がよく聞き取れない。

「まあいい。……からちよつと待ってろ」
すると、金属の擦れるような音がした。

「ほれ、……だ。ちゃんとしろよ……」

「ありがとな、また今度のも頼む」

最後のだけは、ちゃんと聞き取れた。聞き取るのに疲れたのでベッドで横になった。

次の日、フレッドが起きたのは陽も上っておらぬ朝だった。起きてからずっと、昨日いた人のことが疑問として胸に残っていた。あれこれ考えているとミツバが起きる。

「フレッドおはよう」

「……ああ、おはよう……」

「どうしたのフレッド？ 何か考え事？」

「いやなんでもない。それよりもうすぐ出発だから準備しといて」
そう言つと、ミツバは急いで準備を始めた。フレッドは出発する時間になつても、集中が疑問の方向へといつてしまふ。

「フレッド、しっかりしてよね。もうすぐ出発の時間だよ」

「そう言われ、フレッドは急いで荷物を持つ。」

「ああ、じゃあ出発しますか」

フレッドはシッドに別れを告げ、待ち合わせの場所に向かった。胸に疑問を残しながら……。

待ち合わせの場所に着いたのは、待ち合わせの10分前だった。

しかし、レクシオンとシーザーは先に着いていたのである。

「来たな、じゃあ行くか」

レクシオンが声を上げる。フレッドは、昨日と何かが違うように感じたので上から下へとじろじろ見る。

「どうしたフレッド、俺が何かしたか？」

「いえ、何か昨日と違うなと思って……」

「ああ、多分剣を換えたからだと思うが」

と言って、持っている剣を見せる。

「なぜ、剣を換えたんですか？ 剣って命と同じぐらい大切なものだと思いますが」

「昨日の戦闘のときだと思っただが、俺の剣が刃こぼれしちゃってな。昨日急いで剣を買ったんだ。これから、敵国バルカンの領地を抜けるから、剣が役に立たなかつたら困るしな」

レクシオンは剣をしまった。そして歩き出す。

「さあ、出発だ。フレッド達は休憩がしなくなったら言ってくれ」

「はい、分かりました」

フレッドは答えレクシオンの後を付いていった。

第10話（後書き）

ユニークが2000人突破しました。

今まで、ソロモンを読んでいたきありがとうございます。
これからもがんばるので応援よろしくお願いします。

第11話

そして3日後、フレッド達は問題なくバルカン領を進み、ケイロンに着いたところであつた。そこでレクシオンが声を上げる。

「ここが、バルカン最大の貿易地であるケイロンか……さすが最大の貿易地と呼ばれるだけあつて町が人でにぎわっているな。多分、ここがバルカンの資金源になってるんだろ」

レクシオンはシーザーの方向を向く。するとシーザーも頷いた。

「ああ、そうだろ。だから戦いになった時ここを落とせばバルカンの戦力がぐんと落ちるはずだ」

しかし、シーザーは腕を組む。

「しかしどうやって落とすかが問題だな。城門はないにしろ敵もここを死ぬ気で守ってくるはずだからな」

「そんなの力攻めをすればいいじゃん」

「それで落としたとしてもこちらの被害が甚大だ。しかもここはリオーネから遠い。だから、こちらの援軍が来る前にバルカンの援軍が来てここを取り返させられるだろう」

フレッドは聞きなれない単語を聞いたので質問する。

「すみません。リオーネって何ですか？」

「ああ、リオーネはわが国の首都だ。カルトから1週間ほど歩いたところにあるからな。今度来てくれれば案内するぜ」

「そうですか。では今度、行かせてもらいます」

「そうか、分かった。それで、リオーネに来たときは城に来て俺の名前を言えば俺に会えるぜ。俺が出かけてなければな。その時はシーザーの名前を言え。それでいいよなシーザー？」

レクシオンはシーザーの方向を向く。フレッドはシーザーの方向を向くと黙ってうなづく。

「ああ、そういうことだから、安心して来いよ。そしてこんなところで時間を食つて暇はないからな、出発するぞ」

そう言い、グランへと続く出口へと向かっていった。しかし、出口で事件が起こった。

「ちよつと待て、貴様ら」

そう言われ振り返ると、パブロやリクと似ている格好をした人がバルカン兵6人を率いて立っていた。

「何ですか？」

フレッドは答える。

「お前らには興味がない。俺が言ってるのはその奥の2人だ」と言いレクシオンとシーザーを指差す。

「なんだお前、俺が何かしたとでも言うのか」

レクシオンが叫び、体を前に乗り出す。

「そうじゃない、そうではないが……その2人が犯人に似ていたからな、気になったんだ。すまないが少しだけ協力してくれないか？」

「協力ってなんですか？」

「持つてる荷物だけ確認させてもらう。さきほど強奪事件があつたな武器屋で起こったんだ。取り逃がしたらなんか言われるからな」

「分かった。フレッド達はそこで待ってるすぐ終わるからな」

レクシオン達はバルカン兵についていった。5分後さきほどの人と一緒にレクシオン達が帰ってきた。

「私はバルカン騎士団所属のアレンだ。協力感謝する」

「さあフレッド、ミツバ行くぞ」

レクシオンはそう言うのと足早に歩いていく。ケイロンから離れたところでミツバは質問する。

「あの、大丈夫だったんですか荷物の検査」

「何がだ？ 何も持ってないんだから大丈夫だろ」

「だって、同盟を申し込む時、誓紙が必要だと思っんですが……」

「なんでそれが見つからなかったかって？ それはな……」

そういつてミツバに近づく。そして、手に持つてる荷物から1通の手紙を取り出した。

「え……いつの間に入れたんですか」

「この町に入る前に入れたんだよ。フレッドに入れても良かったんだけど、もしフレッドもさっきの荷物検査を受けていたら見つかったらちやうだろ」

「だけど黙って入れるのはひどくないですか？」

「悪かったなミツバ、これで危ないところは全部過ぎた。助かったぞミツバ」

「まあ、必要なことだったから良かったんですけど。あと……早く出発しましょ」

そういうと、皆はそれぞれの目的地に向けて出発した。

第12話

次の日の陽が沈む頃、フレッド達はナルに到着したのである。

「ここがフレッド達の村のナルか……何にもないけどいいところだな」

フレッドが声を上げる。

「だけどこの人達は、町のほうがものがあるから良い。とか言ってますよ」

「それは多分、町の面倒臭さを知らないからだと思うんだが……」

「それはこつちだって一緒ですよ。ないことのつらさを知らないからだと思いますが……あ、それとこれから村長に紹介するので付いてきてください。すぐそこにあるので手間は取らせません」

「それはありがたい。ついでに今日の宿も取らせしてくれるか?」

「と言うかここに宿屋なんてないですよ。この少し先に在るところかケイロンで済ましてしまいます。立てても儲からないと言うのが1番の理由ですけどね」

「じゃあどうすればいいんだ?」

レクシオンは困ったように腕を組む。フレッドは1ついい案が思いついたので言ってみた。

「あの赤い家が僕の家です。もしよかったら僕の家で泊まりませんか? 狭くて悪いんですけども」

「それはありがてえ。そうさせてもらうぜ。それで早く村長のところに行こうぜ」

その後ろで黙ってシーザーが頷く。それを見てフレッド達は村長の家へと向かった。

「おお、フレッドがちゃんと貰ってきたか」

「はいよ、爺さんが言ってたのはこれでしょ」

フレッドはシッドから貰った武器を渡す。

「これじゃ、ワシの求めていた武器は……ところでフレッド後ろに

いるのは誰じゃ？ うーむ、どこかで見たことあるような気がするんじゃが」

「この人たちは、カルトで出会ったセパイアの将でレクシオンさんとシーザーさんです。これから2人はグランと同盟を結びに行く途中なんです」

「そうか、分かった。レクシオン殿、シーザー殿、フレッドとミツバを助けていただきありがとうございます。ところで今日止まる場所はあるのかい？」

村長はレクシオンとシーザーに向かって頭を下げる。レクシオンも礼を返し言う。

「今日はフレッドの家に泊まることになったので大丈夫です」

「そうか、それで1つお願いがあるのじゃが……聞いてもらえんじやろか」

「願いつて何ですか？」

「そのグランとの同盟とやらにフレッド達を連れてってほしいのじやが」

「そんな事だったら喜んで承諾いたしますよ」

レクシオンはフレッドの肩を叩く。

「そういう訳だ。これからもよろしくな」

「はい、よろしく願います」

「じゃあフレッドの家に行こうぜ、腹が減っちゃった」

そう言われたので、村長、ミツバと別れを告げフレッドの家に行った。フレッドの家では、レクシオンとシーザーからいろいろと聞いた。

そして次の日、フレッド達はグランの首都トランに向けて出発したのである。

「フレッド気をつけろよ。トランは今荒れてるからな、何が起るかわからないぜ」

と、出発前に注意を受けていた。マイクを行きたかったらしいが、手伝いがあるからいけない。今度話を聞かせてくれ。あとトラン

の交易品も買ってきてくれるとありがたいぜ」

とか言っていた。しかし、すごく悔しそうな顔だった。

昨日聞いた話によるとトランはナルから歩いて3日ほど掛かる場所らしい。そして、グランはもともと小国だったのだが他の国を陥れるなどの行為を行い勢力を伸ばしてきたのである。しかし、そのつけが回ってきたのか3年前に大規模な反乱が起こったのである。その反乱が鎮まったのが少し前らしく、今は治安が荒れているらしい。

第13話

先頭を歩いていったレクシオンは振り返り言う。

「しかしなあ、何故ジャン様は、こんな国と同盟を結びたいんだ？俺にはさっぱりわからん。分かるかシーザー？」

「多分だが理由は3つある。1つ目は人数を増やし2手に分かれて攻撃をする事。2つ目はバルカンを攻めているときにグランから攻められないように。そして3つ目は周りの国を手に入れた国の戦略が欲しいからだと思うんだが。しかし、ジャン様が同盟を結びたいと言ってるんだから何かしら理由があるだろ」

その回答を聞いたレクシオンは納得した顔で頷く。フレッドは聞いたことの無い単語があり聞こうとするが、その前に、レクシオンがフレッドたちに説明をした。

「ジャン様は、わがセパイアの国王なんだ。昔は、5年前の戦乱で軍師を務めていたんだぜ」

「へえ、そうなんですか……だからさつき——何かしら理由があるんだから大丈夫だろ——とかいってたんですね」

レクシオンは黙って頷き、歩き出す。そして3日後フレッド達はグランの首都トランに着いたのである。

「ここがトランだ。今から俺達は城で誓紙を渡しに行くが、フレッド達は城の中に入ることはできないから城の前で待っていてくれ。すぐ終わらしてくるから」

と言ってレクシオンとシーザーは城の中へと入っていった。30分後、城の中から出てきたレクシオンは城から離れた場所に移動し、こう言ったのである。

「あの野郎、何様のつもりだよ。何が——私達には同盟などいらんが仕方ないから見てやろう、ほれ早くその静止を貸さんか——だ。偉そうにしゃがってなんであんな奴の国と同盟を結ばなきゃいけないんだ」

そう言つて暴れそんなレクシオンをシーザーが諫める。

「シーザーそんな事言つてないで早くリオーネに帰るぞ。ジャン様が報告を待ってるんだからな」

「そういえば、そうだな。じゃあフレッド、ミツバ早く帰るぞ」

レクシオンは足早にトランを去つていった。しかし、トランを出発して次の日、そそくさとトランから出てきたので交易品を買う暇が無かった。なので通りすがりの商人から交易品を買うことにした。「買ってくれてありがとうございます。ところで今からどこに向かうのですか？」

品物を受け取りつつフレッドは答える。

「今から僕達はナルへ、レクシオンさん達はリオーネに帰る途中なんですよ」

フレッドはレクシオンを指差しながら言う。商人たちの顔を見ると驚いたような顔をしていた。そしてフレッド達は次の瞬間信じられない言葉を聴いたのである。

第14話

「さつきナルから来た人に話を聞いたんだけど、バルカン軍に攻められてるといふ話を聞いたんだ。しかもその人は火傷を負ってすぐに息を引き取ったんだ」

フレッドは一瞬耳を疑った。

（今、ナルがバルカン軍に攻められたとか言ってたな……）

フレッドにとってはそれが空耳であつてほしかった。

「あの……今、よく聞き取れなかったんですけど……ナルがバルカン軍に攻められていると言いました？」

フレッドは恐る恐る商人にもう一度聞き返す。

「ああ、言った。この話は、今から3時間前に聞いた話だからな、今はもうバルカン軍に攻め落とされてると思う。この情報をくれた奴はこのすぐ先の町にいる。これ以上の話が聞きたかったらそいつに会ってみるといいぜ」

それを聞いたフレッドは、何も考えずに次の町バルスに走っていった。

バルスに着いたのは陽が沈み始めたころであつた。バルスへ向かう道のりの途中でミツバ達も追いつき一緒に行動していた。フレッドはバルスに着いた時息が切れていた。しかし

（今は休憩してる場合じゃない……ナルが緊急事態なんだ。早く話を聞いてバルカン軍を倒せばマイク達や村長、それにカーンさんと会えるかもしれないんだ）

フレッドはバルス町中を当てもなく探す。何時間も。

「おい、フレッドどこにいるかも分かんねえ奴を探したってキリがないぜ。しかもそいつはもうここにいないかもしれないじゃねえか。そんな奴を探すより、ナルにいるバルカン軍の情報を調べたり、これからの戦いに備えて剣を鍛えたり、研いだりしたらどうだ。焦る

気持ちには分かるがその所為で命を落としたら元も子もなくなるぞ。それに、村長やマイクだって逃げ出してるはずだろ。それにバルカンだってそう簡単には人は殺さないだろ。そんなことがバルカン国民に伝わったら、国民での戦争反対ボイコットが起こるに違いないと踏んでいるからな。5年前の戦乱のときに敵国の住民を700人程殺したときにも起こったしな」

レクシオンがこっちを見て言う。フレッドはその言葉を聞き、気持ちを落ち着かせる。

「すみませんでしたレクシオンさん。今日は体をゆっくり休めてまた明日から、情報を探すようにします」

そついうと、フレッドは宿屋に向かって体を休めることにした。

第15話

次の日、フレッドはミツバ達とナルに向かった。途中でナルにいた村人と5人ほどと出会った。それを見てフレッドはマイクは生きていたかもしれないと少し安心した。しかし話を聞くとマイクはカーンと共にナルを守るためにバルカン兵に立ち向かって行ったらしい。それを聞いて一瞬焦ったが、昨日のレクシオンの言葉を思い出し、気持ちを落ち着かせる。

そして2日後、フレッド達はナルに到着したのである。そこで見た光景は悲惨であった。家は何も無い野原のように焼きつくされ、村長の家があった前の広場には、数え切れないほどの亡骸が山のようにならまれているのである。フレッドとミツバはその光景を見て唖然とする。その時、後ろからガサツと言う音が鳴った。

（なんだ……敵襲か？　しかし、敵襲なら声を上げて援軍を知らせるはず……）

そう思っただけ振り返ってみた。ガサツという音の正体はミツバが驚き後退したときに踏んだ木の葉であった。敵じゃなくて良かったと安心する。しかし、その音の所為でバルカン軍がわんさかと集まってくるのであった。

「どうするのフレッド？」

ミツバはフレッドに聞く。フレッドはどうするか聞こうとレクシオンの方向を向く。すると、レクシオンは奥のほうにいてこっちに向かって手招きをしている。フレッド達はバルカン兵にはれない様に静かにかつ速くレクシオンのところへと移動した。ばれないところに移動したすぐ後、将らしき人物が号令を掛けたのが聞こえた。

（レクシオンのところに行くのが数瞬でも遅れていたら……）

そう考えると身震いがしてきた。しかしレクシオンはバルカン兵にはれないように横から後ろへと回り、村を通って向こう側行くという行動に移っていた。

フレッド達も静かにその後を追う。バルカン兵に見つからないようにフレッド達は村の中に入る。すると80人ほどのバルカン兵がナルにいる。これを見てシーザーがつぶやく。

「このままこの4人で行動するとバルカン兵に見つかって援軍を呼ばれる。だから、ここは1人1人バラバラに行動をして村の出口を目指すのが一番得策だと思う」

フレッド達はシーザーの言葉を聞き入れらばらになって村の出口へ向かうことにした。

そして、10分後フレッドは村の中心部まで進んだ。その時、後ろから声が聞こえた。

「うん、何だあれは……この部隊と服が違うな……バルカンから来た新手の援軍か……だけど援軍なんて来ないって言ってたな……一応調べてみるか」

振り返るとバルカン兵1人がフレッドたちのほうに向かって来たのである。隠れようとするがすぐに隠れられる場所がない。フレッドは隠れる場所を探すため周りを見回す。

（一番近くにある場所でも30歩、しかも村の中心にいる兵士や将からまる見えの状態になり、バルカン兵が集まってしまう。このままではバルカン兵に居場所がばれ捕まってしまう。）

しかしフレッドにはこのピンチを抜ける策が思い浮かばない。あれこれ考えているうちにどんどん近づいてきていて、今はバルカン兵はフレッドから50歩ほどの場所に立っていた。

第16話

バルカン兵との距離が30歩を切ったときフレッドは行動を開始した。フレッドは一瞬のうちに間合いを詰める。バルカン兵は一瞬怯んだが、すぐさま剣を取り出す。しかし、フレッドは怯んだ一瞬の隙を見逃さなかった。バルカン兵に向けて剣を払う。バルカン兵は口から血を吐きながら断末魔を叫び倒れた。

「よし、後は出口に行くまで、もう一息だ」

しかし、ここで1つ誤算が生じた。先ほど殺したバルカン兵の叫び声によりバルカン兵が集まってきたことだ。そのためフレッドは隠れざるを得なかったのである。

「まずいな……このままだと見つかるのも時間の問題だな」

フレッドはつぶやきながら周りの状況を確認する。まだバルカン兵10人ほどが警戒に当たっていた。フレッドはバルカン兵の目を盗みながら一歩一歩着々と前進する。

そして最大の難関の場所に到着した。隠れている場所から村の出口までは40歩程しかないが出口までの道のりは拓けていて、見通しが良いためにバルカン兵にすぐ見つかってしまう。だが幸いなことに先ほど起こった事件のおかげで出口にいる兵士は4人に減っていた。

（このまま進めば絶対に見つかる……しかし、1人ずつ殺していったとしてもさつきみたいに悲鳴を上げられバルカン兵が集まってしまふ……どうしたらいいんだ）

考えていると、フレッドの左側から悲鳴が聞こえた。その方向を見るとミツバ、レクシオン、シーザーの三人が一緒に行動をしているのが見えた。フレッドは、三人の方向に向かう。すると、ミツバ達もこつちに気付き合流する。

「みんな、なんで一緒に行動してるんですか……僕だけですか1人で行動してたのは……」

「そうじゃねえんだよ。さっき悲鳴があつたら、その時バルカン兵に化けていたミツバと出会ったんだよ。それとシーザーとは……」

レクシオンは言葉を止め、剣を抜き振り下ろす。その瞬間、目の前に赤い液体が飛び散りドサツという何かが落ちたような音がした。フレッドは音がした方向を見た。そこには、胴を切り口に真つ二つになっているバルカン兵の骸があつた。

「くだらなく話している暇はない。このままだとどんどんバルカン兵が来る、早く脱出するぞ」

レクシオンは走って村の出口に向かう。フレッドもその後を追った。しかし、バルカンの弓兵が息もつかず矢を打つ。しかし走りながら撃っているのと遠くから撃っているのでフレッドのところまで届かない。村の出口を出てもしつこく追ってくる。しかし、1人、また1人と追うのを諦めたらしくフレッドは追手、矢が来ないことを確認して声を上げた。

「レクシオンさん、もう追手は来てませんよ。ちょっとだけ休憩させてください」

レクシオンは立ち止まり後ろ向きになって辺りを見回す。十分に確かめたらしくレクシオンが言う。

「追つてはこないようだな。よし、みんなここで少し休憩するぞ。出発は30分後ほど、それまでには出発ができるように支度を整えとけ、それとバルカン兵と出会ってもすぐ逃げることに」

レクシオンは、フレッド、ミツバ、シーザーを見回しながら言う。3人は小さく頷くと腰を下ろした。

第17話

フレッドは腰を下ろした後シーザーを見る。すと思った以上に汗をかいていた。

（シーザーさんは無口だけど疲れるときは疲れるんだな。何も言わないから、結構大丈夫なほうだと思ってたんだけど……）

フレッドは、腰を下ろした後10分ほど休憩をした。その後、荷物を確認した。ふと剣に目をやると、先ほどの戦闘に寄って刃がこぼれていた。なのでレクシオンに砥石を貰い、剣を研ぐ。

「何で剣を持つている奴が砥石を常備してないんだ？ これじゃあ戦闘になった時、刃こぼれたままの剣で戦うことになるぞ。これからはちゃんと砥石を持つとけよ」

と砥石を貰った際にレクシオンに言われたのである。フレッドは砥石を貰いながら礼を言い自分の荷物がある場所に戻った。

30分後、フレッド達はセパイアの首都リオーネに向かって出発したのである。

「バルカン国内を通るとつかまる可能性がある。みんなすまんがリオーネには険しい山道で行かしてもらおう」

レクシオンは頭を下げながら言う。フレッド達も安全な方面で行くのを承知し付いていくのであった。

そして、1週間後フレッド達はリオーネに着いた。リオーネまでの道のりは起伏が激しく、入り組んでいた。なので

（初めて通る人は絶対に道に迷うんじゃないか）

とフレッドは思った。

「おい、フレッド行くぞ。ここは他の町と比べて広いからな道に迷いやすいし、迷ったら二度と俺たちと離れ離れになる。まあ、迷ったときはあの白で俺の名前を出せば俺に会えるからなそれをちゃんと覚えとけよ」

フレッドはレクシオンの言葉を心に留め、後を付いていく。城に

着くまでの間フレッドはリオーネの町を見回す。すると、どの店も活気と人に溢れている。

歩くこと5分、リオーネ城に着いた。レクシオンが城に入るのでそれを追う。レクシオンは城の奥にある階段を登っていく。4階まで上がり突き当たりにある扉を開く。

着いた場所は謁見の間らしき場所だった。奥には3人がゆうゆうと座れるような椅子があり、そこにはセパイア国王らしき人物が座っていた。

第18話

「おお、レクシオン、シーザー戻ってきたか。で、返事はなんと言っていた？ ……ところでレクシオンたちの後ろにいる人物は誰だ？ レクシオン知り合いか？」

「返事は後ほどグランの者が誓紙を持っていくからと申しておりました。そして、この2人は旅の途中のカルトでバルカン軍に抵抗していた者で、途中の宿などで世話になったものです。しかし、グランとの同盟の帰りにこの者が住んでいた村がバルカンによって焼き尽くされて住む場所がなくなったので連れてまいりました」

レクシオン、シーザーは跪きいつもとは違う丁寧な口調で言う。
フレッド達もそれも見て跪く。

「跪かなくてもいいぞ。私の名前はジャン、このセパイアの国王である。ところで、君たちの名前を覚えてくれないか？」

ジャンに質問される。フレッドは立ち上がり答えた。

「僕の名前はフレッドで、隣にるのがミツバです。それでジャン様お願いがあります。僕達をセパイア軍と一緒に行動させてもらえませんか？ この手でバルカン軍を倒したいんです」

ジャンは椅子に座り込み腕を組んで考え込む。考えること5分、まだ答えが返ってこない。そして10分ほど経ったときジャンが沈黙を破り、答えを出した。

「分かった。セパイア軍についていくことを認める。しかし実際は、フレッドとミツバの2人で敵の兵士を調べたりと隠密行動が中心になるようなことだがそれでいいか？」

「はい分かりました。それで、いつ行動を開始するのですか？ 今からって言われればすぐに支度を調べて出発しますけど」

「ああ、それがいつ戦闘を開始するか困っているんだよ。戦争を始めるには宣戦布告を行わなければいけないし、こちらの兵力と敵の兵力を比べて、戦略を練ったりしなければいけないからな。行動し

てほしいときに呼ぶからこの2階にある宿泊施設で待っていてくれ、ではここで失礼する。シーザーちょっとだけ来てくれないか？」
ジャンはシーザーを呼び何かを話し出す。ここでレクシオンがジャンに頭を下げ部屋から出て行つたので、フレッドはジャンに深く一礼してレクシオンの後を追った。

「ここが、お前らの泊まる場所だ。ゆっくり休んどけよ。じゃあな」
レクシオンは謁見の間でジャンと話を終えた後、フレッド達に泊まる場所を教えた。ここでフレッドが声を上げる。

「あの、レクシオンさん今までありがとうございました」

「ああ、どうってことないよ。ただ、バルカン軍に襲われていた人を助けただけだからな。これからフレッド達はバルカンを倒せるように頑張れよ。じゃ、俺はこれから仕事があるから」

そういうと、レクシオンは階段を駆け下りていった。

第19話

「レクシオンさん行っちゃったね」

ミツバが呟いた。フレッドは頷きながら言う。

「レクシオンさんには助けられてばっかだったからな。今度会うときはレクシオンさんに助けられないように強くならなくちゃ」

フレッドは振り返り言葉を続ける。

「で、ミツバ……リオーネに着いたんだから新しい武器とか欲しいから買物に行こうよ。ここならすぐく町もにぎわってるしいい武器とかが売ってると思うんだよね」

「うん、分かった。私もアクセサリとかが欲しいもん。行かないという手はないよ。さ、フレッド行くよ」

そう言うつと、ミツバは階段を勢いよく駆け下りていく。フレッドもミツバの後を追い階段を降りた。

5分後、フレッド達はリオーネの街中にいた。先ほど城に行くときも見たが、他の町と比べ、2倍程の人であふれていた。

「フレッドこっちに来てよ、これ似合うかな？」

「フレッドに似合うもの見つけたよ、こっちに来て見てよ」

フレッドは、前回ケイロンにいたときと同じような言葉を耳にした……が、しかし1つだけ違っているところがあつた違つてるといふか、抜けていることがあつた。それは……

——ナルのことについて話さなくなつた——
ということだ。

「これは村長さんに買つてつてあげようよ」

などと前は言っていた。しかし、今はそんな言葉は一言も出さない。どうしてかを聞こうとしたいが

（前と同じように明るいからな、話しかけて落ち込ませて悪いし……）

天を見て考える。あれこれ考えても仕方ないと思ひ声を掛けよう

と前を見る。すると、ミツバは人ごみの向こう側に行っており、フレッドの方向に向けて手を振っている。

「おいフレッド何やってるの？ 早くおいでよ」

「分かった。今から行くから待ってて」

フレッドは思っていたことを心の中に閉まい、ミツバに向かって走り出した。

第20話

陽も沈んだ夜、フレッドはやつとの思いでリオーネ城にある部屋に戻ってきた。あの後、ミツバはほぼ全てと言っていいほどの店を回り、買った物をフレッドに預けていた。その所為で腕は筋肉痛になり、剣を握るのも大変なぐらいになってしまった。

「このまま、仕事が出来たらどうしようか……」

フレッドは小声で呟いた。しかし、ミツバには聞こえていたらしい。

「それは、私が仕事をするから大丈夫だよ」

と、フレッドに近づいてきて言う。

「ありがとう、助かるよ」

「いいって、フレッドがこんな風になったのも私があんなに買ってフレッドに持たせたのが理由なんだから」

そう言っ、荷物の山を振り返る。

「でもそんな急には仕事は来ないでしょ……多分、仕事に来るまでゆっくりと腕を休めとくよ」

「そうしときなよ、体壊しちゃバルカンを倒すことなんて出来ないんだからね」

「ああ、そうだな……」

フレッドは睡魔という敵にやられ、寝てしまったのである。

3日後、フレッド達に初めての仕事の依頼が来たのである。

——今からカルト周辺に行っ、バルカンの状況を調べてきてほしい。理由は、前回レクシオン、シーザーが行ったときにバルカン軍の兵士に出会ったから——

という依頼の内容だった。理由は一緒にいたので知っているが、仕事内容を伝えに来た人がフレッド達の事だとは思っていなかったようである。

「分かりました、出発はいつですか？」

「ジャン様は明日か明後日が望ましいと言っておったが、私は今日出発したほうがいいと思っっている。なぜなら、早く敵の戦力が分かれば先手先手で行動ができるから着々とバルカンの戦力を削っていけるからのに加え、そうしたほうが早く決着が付くからな。セパイアの損害も減らせるというわけだ。今から出発してくれないか？」

フレッドは考える。5分……10分……沈黙の時間が続く。

「フレッド、出発は明日でいいと思うんだよね。だって今話を聞いてても1日変わったって何の問題もないようにしか思えないんだもん。そうだよなフレッド？」

ミツバがこつちを見てくる。その言葉を聴きフレッドは答えを決めた。

第21話

陽も沈んだ夜、フレッドはやつとの思いでリオーネ城にある部屋に戻ってきた。あの後、ミツバはほぼ全てと言っていていいほどの店を回り、買った物をフレッドに預けていた。その所為で腕は筋肉痛になり、剣を握るのも大変なぐらいになってしまった。

「このまま、仕事が出来たらどうしようか……」
フレッドは小声で呟いた。しかし、ミツバには聞こえていたらしい。

「それは、私が仕事をするから大丈夫だよ」
と、フレッドに近づいてきて言う。

「ありがとう、助かるよ」

「いいって、フレッドがこんな風になったのも私があんなに買ってフレッドに持たせたのが理由なんだから」

そう言って、荷物の山を振り返る。

「でもそんな急には仕事は来ないでしょ……多分、仕事に来るまでゆっくりと腕を休めとくよ」

「そうしときなよ、体壊しちゃバルカンを倒すことなんて出来ないんだからね」

「ああ、そうだな……」

フレッドは睡魔という敵にやられ、寝てしまったのである。

3日後、フレッド達に初めての仕事の依頼が来たのである。

——今からカルト周辺に行つて、バルカンの状況を調べてきてほしい。理由は、前回レクシオン、シーザーが行ったときにバルカン軍の兵士に出会ったから——

という依頼の内容だった。理由は一緒にいたので知っているが、仕事内容を伝えに来た人がフレッド達の事だとは思っていなかったようである。

「分かりました、出発はいつですか？」

「ジャン様は明日か明後日が望ましいと言っておったが、私は今日出発したほうがいいと思っっている。なぜなら、早く敵の戦力が分かれば先手先手で行動ができるから着々とバルカンの戦力を削っていけるからのに加え、そうしたほうが早く決着が付くからな。セパイアの損害も減らせるというわけだ。今から出発してくれないか？」

フレッドは考える。5分……10分……沈黙の時間が続く。

「フレッド、出発は明日でいいと思うんだよね。だって今話を聞いてても1日変わったって何の問題もないようにしか思えないんだもん。そうだよなフレッド？」

ミツバがこつちを見てくる。その言葉を聴きフレッドは答えを決めた。

第22話

「分かりました。今日出発します。でも、出発のための荷物などを整えなければいけないので、少しだけ時間がほしいので、出発は2時間後ぐらいでいいでしょうか?」

「ああ、そのぐらいが一番いいと思っていた。フレッド君、無理を言ってすまなかったね。私はこれから仕事があるのでここで失礼するよ。じゃあ、今度結果を聞かせてくれると助かるな。……っと、そういえば自己紹介がまだだったね。私の名はルドランだ。仕事が終わったら城に来て私の名前を言ってくれ。」

「じゃあな」
そう言つと、ルドランは頭を深々と下げると、階段を下りていった。

「フレッドなんでそんなことを承諾したの? ジャンさんが明日でいいって言つてたじゃないルドランさん自身が、それなのに今日出発するってどういうことなの?」

「それは……戦いが早く終われば被害者が少なくなると思ったからだよ」

フレッドの言葉を聞くとミツバは笑い出した。

「さすがフレッド、『勝つこと』じゃなくて、『どれだけ被害を少なくして勝つか』ということを一番に考えてるのね。ほかの人だったら多分『勝つこと』を重点的に見てると思うわ」

「それより、出発するって言つたから早く準備に取り掛かるうよ」
フレッドは荷物を整理する。ミツバもうなずき準備に取り掛かるのであった。

2時間後、フレッド達はリオネの門の前にいた。

「ミツバもうすぐ出発をするけど忘れ物とかしてない? ここで出発したらリオネに戻って来るのはどんなに早くても15日はかかるからね。今、荷物を確認してよ」

もう一度荷物を確認する。5分ほど調べ、忘れ物がないことを確認する。そして、カルトに向かって出発した。

しかし、4日後事態は急展開を見せることになった。それは、バルカン軍の手によってカルトが攻め込まれ焼かれたことである。フレッド達は急いでカルトに向かった。

フレッド達はカルトに向かっていく途中、セパイア軍の斥候に出会った。斥候は、カルトが焼かれたことを聞きフレッドたちに他の仕事を伝えに来たらしい。

第23話

その仕事の内容とは

——カルトの近くのロザルトに行つてバルカン軍の襲撃を備えるとともに、城の守備を固めること、ロザルトに住んでいるセパイア国民の安全確保と脱出路を作ること——

らしい。すぐに進軍方向を変えて出発しようとしたとき、「今は持つてないが渡すものがある、もうすぐ持ったやつが来るから待つてくれ」と言われたので立ち止まった。

しかし、10分待つても誰も来ない。

「誰も来ないじゃないですか。私達はもう出発します。ジャンさんに新しい仕事を頼まれたからね」

「もうちよつとで来るはずなんで待つててくださいよ」

「それはさつきから何回も聞いてます。でも来ないじゃないですか。行こうよフレッド」

ミツバはロザルトに向かつて出発しようとした。その時、大勢の軍勢のような足音が近づいてくるのが聞こえた。フレッドは足音の方向を向く。すると、1000人程の軍勢が近づいてきていた。

（こんなところでバルカン軍に出会うなんて不運だ……しかし、ここで少しでも兵力を削ればロザルトでの戦闘が楽になる。しかし、無理をするとバルカン軍にやられ、元も子もなくなる）

考えている時間がなくここで行動するべきと決断したフレッドは剣を抜き、軍勢が来るのを待つ。しかし、斥候は手を振って、軍勢を呼ぶような格好を取っていた。

「何やってるんですか……あれは敵の軍勢ですよ？ まさかあなたは敵ですか」

フレッドは剣を斥候の方向に向ける。

「敵？ 違いますよ良く見てください。あれが、フレッド殿に渡し たかったもので、ジャン様からの贈り物です。今渡した800の兵

でバルカン軍を倒してきてくれたそうです。では私はこれで」

そういつて、斥候は軍勢の方向へと走っていった。そして、軍勢がこちらへと向かってくる。

「フレッド様だな？ 私はこのセパイア軍弓兵隊を率いている隊長のジャックだ。よろしくな」

フレッドが聞くにはこの隊は

弓兵	400人
槍兵	100人
剣兵	100人
輸送兵	100人
衛生兵	100人

という振り分けだった。それと、兵は自分で雇って良いらしく、振り分けも自分で決めていいらしい。そのかわり雇うための金や武器を買うための金は、自分や自分の軍が功績を立てて貰った金でなければいけないということらしい。

第24話

しかし特例があり、先鋒またはしんがりを務めることその上、持っていた全兵力の半分の以上を失っていたら、失った兵力の半分を貰えるという事だった。

「ふーんなるほどね。様するに自分の軍は自分で管理しろその代わり軍のことには口を出さないからってことだね。でもどうやって指揮を執るの？ もし武将が裏切ったらその軍全部が裏切るんだよ？ そのときはどうするのさ」

「だけどジャン様は裏切らないような手を打っているのさ」

「どんな風に？」

「まずは、金だ。評定の際にももらえる金と別に特別賞みたいなものがあるんだ。敵の大將を自分もしくは自分の軍が殺害または捕縛した場合、普通の10倍の金がもらえるんだよ」

ジャックが言うには、普通の兵士1人につき100ガロンが、副将1人につき500ガロンが、武将1人につき1000ガロンが貰える。

しかし、大將を討ち取った場合、1000ガロンに加え、特別賞の10000ガロンがもらえるということらしい。

「うん、それで他にはなにがあるの？ まずはって言うって事は他にもあるんだよね」

「もちろん。2つ目は領地のことだ。功績を挙げたときに町または城を1つ以上もらえるんだ。ここまでは他の国と一緒にがこの後が他の国とはちよつと違うんだぜ」

「その違いって何ですか？」

「町または城の収益の6割をセパイア国が、そして残りの4割が所有者である功績を挙げたやつが貰っていいという仕組みだ。ちなみに他の国は1割程度だつて聞いたことがある」

フレッドはそれなら謀反も起こらないよねと考えていたが、1つだけおかしいことを思いついた。

「ということは、嘘の報告をしちゃえばいいんじゃないの？ そうすれば、もらえる金が増えるじゃないですか」

「そう思って、虚偽の報告をする奴はわんさかいたさ。だけどジャン様はその虚偽を見抜き、虚偽を報告したやつに3年以上の禁固刑に処したんだ。なぜ分かったのかは真実を知るやつはジャン様ぐらいだろう。巷の噂では忍者と呼ばれる隠密部隊を雇って、全武将のことを監視して、逐次報告させているらしいまあ、噂に過ぎないがな」

「なるほど。普通にしていれば優しいけど、裏切ったら容赦はしないってことですか……」

「そういうことだ。だから裏切るようなまねは絶対すんなよ。俺たちまで敵になっちまう。それとこんなところで時間を食ってる暇はないからな、さっさと出発するぞ」

そういうと、ジャックは軍をまとめロザルトに向けて出発した。

第25話（前書き）

すいません……いろいろあって今回はいつもより短いです。
これからはこういうことがないように気をつけます。
本当にすいませんでした。

第25話

「おい、早くしてくれよ。フレッド様が前で指揮を執らないで誰が執るんだよ？　しかも、フレッド様が前に来ないと兵達の士気を揚がらないぜ。このまま、バルカン軍と戦闘を開始しても負けるのが目に見えてんじゃんかよ。さあ、早く前に来て指揮を執ってくれよ」
そう言われ、急いで兵の先頭まで走っていく。その後ろからミツバがついてきた。先頭に着くとジャックが隣に来た。ジャックは懷から印みたいなものを取り出し、フレッドに渡す。

「ジャックさん、これは何ですか？」

「フレッド様、まず俺に敬語を使うのを止めてくれ」

「うーん、敬語を使わないとなんか落ち着かないんですね」

フレッドは頭を抱える。

「フレッド様は俺の上に立ってる人なんだから、俺に対しては使うなよ。分かったな」

「ああ、分かりましたよジャック。でその印は何なの？」

敬語と敬語じゃないやつが混ざり合って変な言葉になってしまった。

「これは、この部隊を仕切る人物が持つ印だ。今まではこの弓兵部隊を仕切るやつがいなかったから俺が持ってたんだが、今日からはフレッド様が仕切るんだからな。ちゃんと渡したぜ。さあ、バルカン軍を倒しに行こうぜ」

「ちよつと待つて、ロザルトには兵がどれくらいいるの？」

「ジャン様が言うには1000程の兵がいるとか行ってたが……」

「そうか、じゃあ出発するぞ」

フレッドは頷きロザルトへ出発した。

第25話（後書き）

アクセス1500突破しました。

今まで読んでくださってありがとうございます。

これからもがんばっていくのでよろしくお願いします

第26話

フレッド達はロザルトにつくまでに3時間程しか掛からなかった。しかし、現在ロザルトの前で陣を張っていた。なぜロザルトの前にいるのかというと、ロザルトがバルカン軍約1300人に包囲されているからであった。

ここでジャックが声を上げる。

「どうするフレッド、敵はこっちに気付いてないようだが」

「そんな後ろから急襲しちゃえいいじゃん」

ミツバが立ち上がりながら叫ぶ。それを見たジャックは瞬時に口をふさいで座らせた。

「騒ぐのは絶対に止める、もし、バルカン軍にばれたら兵力に劣るこちらが負ける。そうしたら、ロザルトをバルカンに取られその上にセパイア軍全軍の士気が落ちるぜ」

フレッドが言葉をつなげる。

「そうだよミツバ、そうしたら逆にバルカン軍の士気が高くなってバルカン軍の逃走兵がぐんと減る。そうしたら最終的には、セパイアやグランはバルカンの手によって滅ぼされるよ」

ミツバは首をかしげたままフレッドに聞く。

「何で士気が上がると、兵って強くなるのかな？ あ、それとフレッド、ジャックさんに使ってないんだから私にも敬語使わなくて良いよ、そっちのほうが疲れないし良いでしょ」

「うん、そうさせてもらうよ。で、ジャック何時仕掛けるの？ このままじゃロザルトの食料がなくなってるってジリ貧になっちゃうけど。どうするの？」

「ああ、今はそれに困ってるんだ。今仕掛けても兵力の差で負けるしな、ロザルトのやつらと連絡が取れば挟み撃ちができるんだが連絡をとる方法がない。もし連絡がとれるか、もしくはバルカン軍から脱走兵が出てくれればいいんだけどね。まあ、待ってればその

うち音を上げると思うよ。それか、補給部隊を叩くというやり方もあるぞ、どうするんだ？ 決定権はフレッド様にあるんだ。さあ、決めてくれ。フレッド様が決めたことに誰も異議は持たないからさ」
フレッドは腕を組んで考える。

（どれもいい案なんだよな……どうするか）

その時、フレッドはいい案を思いつき話してみた。

第27話

「あの、この案でいっても良いかな。まずジャックは剣兵、槍兵、輸送兵、衛生兵を50人ずつ率いてバルカン軍の補給部隊を叩きに、ミツバはロザルトの人達と連絡を取れるように頑張ってくれ。それで、僕が残った兵士を率いてバルカン兵に攻撃を仕掛ける」

「だけど、バルカン軍は1300人の兵士がいるんだぜ、ロザルトにいる1000人の兵士でも歯が立たないのに800人の兵士しかないこの舞台で太刀打ちできると思ってるのか？　しかも、俺が200人の兵士を率いるから実際には600人……バルカン軍の半分しかないんだぞ。異議は持たないって言っただけでこんなことをいうのは悪い気がするが、勝ち目のない戦いのことを言われたら黙ってられるかっていうんだよ。そこまで言うなら俺の兵士を持つてけよ」

「ジャック、ちょっと考えてみるロザルト対バルカン軍だったら1000人对1300人の勝負だから勝ち目はないがこの隊対バルカン軍は800、いや600人对1300人にはならないんだぜ」

「何でだ？　脱走兵が出るわけでもあるまいし……」

「バルカン軍も全軍この隊とぶついたらロザルトの包囲がから空きになって背後を突かれ、1600人对1300人という兵力の差という条件がついた上に挟み撃ちの格好になってるといいう最悪な状態になるからロザルトの包囲のために少なくとも700……いや、800の兵は必要だろう。とすると600人对

500人になり、兵力的にこちらが有利になるだろ」

「なるほどね、じゃあ、その案でいこうか」

ジャックは兵士の1人を呼び作戦を伝える。

「さつきは疑ってすまなかったフレッド様。言われたとおりに作戦を実行する。武運を祈るぞ」

ジャックはそう言って兵を率いて出発した。

「ミツバ、作戦開始だ。残りの兵を率いて出発するぞ」

フレッドとミツバは途中で別れ、ロザルトに陣を張っているバルカン軍の元へと向かった。

バルカン軍との戦闘は、すぐに始まった。

「右隊の弓兵200人はバルカン兵に向けて弓を発射、残りの剣兵は弓兵を守るように守備に徹しろ。左隊も同じくバルカン兵の攻撃、槍兵は剣兵と同じく弓兵の守備に回れ」

「……分かりました。そのように行動させていただきます」

兵士たちはそういい、それぞれの持ち場につき戦闘を開始する。

敵にはロザルトを攻撃するために弓兵をフレッドの隊に回すことができなかったらしく、バルカン兵はフレッドの隊の剣兵、槍兵に近づくことができない。

戦闘開始から30分、敵も攻撃に出るのは無理と判断したのか矢が届かない場所へと後退していった。フレッドは損害を確認するために加え、兵士に敵の情報を確認するようにと命令を下し、兵を集めた。

第28話

損害が調べ終わるのと同時に、バルカン軍の損害を調べていた兵士たちも戻ってきたので、結果を聞いてみる。すると、驚きの結果が返ってきたのである。

「何だつて、バルカン軍がこんなに損害があるの？」

1人の兵士が頷く。フレッドの隊の損害数は

戦死者0人

負傷者17人

脱走者0人

敵からの投降者174人

という結果だった。しかも、負傷者は——敵が来たときに転んですりむいた——などの軽傷の者ばかりだった。しかし、それに対してバルカン軍の損害数は

戦死者31人

負傷者168人

脱走兵259人

と言う悲惨な有様であつた。負傷兵も合わせ敵の兵力は約1000人ほどに減つたのである。このままいけばバルカン軍は兵力の差で負けることが決まる。

「おい、フレッド連絡が取れたよ」

声の聞こえる方向を向いてみる。フレッドは、話の内容で誰だかはすぐに分かつた。

「ミツバ、で結果はどうだった？ ロザルトの人に会えたのか？」

「うん、しかも城から出てバルカン軍と一戦交えるから援軍を頼むということらしいよ」

「分かつた。じゃあ、今から援軍を出すともう一度伝えてくれるか？ 頼むミツバしかできないことなんだ」

ミツバは頷く。

「分かった。その代わりちゃんと敵を引きつけておいてね」

「おう、分かった。じゃあミツバ頑張れよ」

そういうと、ミツバは走ってロザルトへと向かった。

第29話

30分後、ロザルトの方向から音がしたので見てみるとロザルトから火の手が上がっていた。

「どうしたんだ。ロザルトはまだ1000の兵が残っていただろ。それなのになんでバルカン軍に攻め落とされているんだ？ 誰か、ちよつとロザルトの様子を見てきてくれ」

その時ミツバが戻ってきた。

「フレッド心配しないで、あれはバルカン軍をおびき寄せるための作戦だから」

「それでも、ロザルトの住民の人はどうするんだよ」

「さつき、フレッド達が戦っている間に住人たちを裏から逃がしておいたからバルカン軍が突入しても大丈夫だよ」

「いや、そういうことじゃない、何を燃やしているんだ。もし、住人の村を燃やしてれば、ロザルトを守っても意味がないだろ」

「だから、藁を燃やしてるんだ。ジャンさんもそんな事言ってたよ」
フレッドはほつと胸をなでおろす。

「でも、何でおびき寄せるんだ？ 普通にやっても勝てるだろ」

「いや、入り口に落とし穴を仕掛けてあつて、敵を生け捕るように作られてるんだよ」

「そうかそれで成果は？」

「分から——」

「ない、とまで言えなかった。なぜかという、ロザルトから歓声が聞こえたからであつた。」

「何だ、なにが起こってるんだ？」

フレッドは急いで兵を率いてロザルトへと向かった。

ロザルトに着くと、バルカン兵が縛られ正座をしていた。そして、バルカン兵の前には赤髪の将らしき人物が立っていた。

「誰だ貴様は？ ここはロザルト、セパイアの土地だぞ」

赤髪の将は、後ろにいたミツバを見て、態度を変えた。

「これは失礼しました。フレッド殿ですね。先ほど、ミツバさんから話は聞いております。さあ、どうぞ中へ入ってください」

赤紙の将が手招きをする。

「分かりました。今からそちらへ向かいます」

フレッドはそう言い、バルカン兵の間を抜け赤髪の将の元へと向かった。

第30話（前書き）

アクセス2000突破了。

読んでくださった方ありがとうございます。

第30話

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私はカイザー、このロザルトを仕切っているわが父レグラの息子です」

「それで今からどこへ行くんですか？」

「わが父のところですよ。そこで、フレッドさんたちを交えてバルカン兵の処遇について話し合っんですよ。それと父のところに行くときは兵士は外で待機させといてください。いろいろとうるさいので」

今の言葉に腹を立てたのか、ジャックがカイザーに詰め寄る。

「ちよつと待て、うるさいって誰のことだ。俺たちのことじゃねえだろうな」

カイザーはジャックの方向に向き直り謝る。

「すいません、誤解するようになしゃべり方をしてしまつて」

「そうか、で……うるさいやつは誰なんだ？」

「私の父です。私の父は5年前にあつた戦争で功績を挙げこのロザルトのちをジャン様からいただいたのです。しかし、その2ヵ月後悲劇は起こつたのです」

皆が唾を飲む。カイザーは一呼吸入れて話し出した。

「父がロザルトからリオーネに向かう途中で黒ずくめの奴に襲われたんだ。そいつは一撃を与えただけで去つていったんだ。俺はそいつを追いかけ捕まえた。そしてそいつの顔を見て父は驚いた。そいつは、戦争のときに援軍で来たグランの兵士の1人だった。父はかすり傷程度で済んだが、一歩間違えれば死んでいたかもしれない。そして、自分直属の兵士しか信用しなくなつたということだ。だから、他の軍や同じ軍であつても信頼できる人の兵しか合いたくないらしいんだ」

「……………」

沈黙という重い空気が流れる。それを破つたのはジャックだった。

第30話（後書き）

ソロモンにいろいろなことができました。
詳しくは活動報告を見てください

第31話

「分かった、俺たちは外で待ってる。フレッド様は、早く話をつけてきてくれ。頼んだぞ」

「ああ、分かった。じゃあ、そこで待っていてくれ」

フレッドはジャックたちを置いて、カイザーの後を付いていった。フレッドは、レグラに会って驚いた事があった。それは、片目に眼帯があつたことである。

「おお、フレッド殿来ましたか。さあさあ、どうぞ席に座ってください」

強面の顔なのに対して喋り方が丁寧なのだ。そんなことを考えながら、椅子に座る。

「いきなりですが本題に入りましょう。捕らえたバルカン兵の処遇はどうでしょうか？」

周りでいろんな意見が飛び交う。

ここで殺して敵の指揮を削ぐとかリオネに送ってジャン様の判断を仰ぐという意見が多数出た。そこでフレッドは思い切った行動に出た。

「すいません。その兵達を私の軍にもらっても良いですか？」

一瞬沈黙が流れた。しかしその後批判の声がだんだんと上がってくる。フレッドは諦めるために、声を上げようとした。その時1つの言葉がその場を黙らせた。

「ちよつとみんな一回落ち着いて、フレッド殿の話を聞け。さあ、フレッド殿なぜそう言ったのか理由を話してくれませんか」

「はい、さっきバルカン兵を見たのですが……なかなか使えそうなやつがいたんですよ。その方がほしいからです」

「なるほどな……」

レグラは少し考え込み、答えを出した。

第32話

「分かりました。バルカン兵、フレッド殿に差し上げます。その代わりといつてはなんですが、息子のカイザーを連れて行ってもらえないでしょうか？」

フレッドは間を空けずに答えた。

「喜んで承ります。カイザーさんのような統率力のある、将が欲しかったところなんですよ。カイザーさんは兵に武器の扱い方とかを教えるのが得意そうですから、今もらった兵の訓練もできそうですし」

「それは良かったです。カイザーをよろしくお願いします」

その言葉と同時にカイザーがやってきた。

「フレッド殿、よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく願います。早速なんです、バルカン兵に事情を伝えてもらえませんか？そして、兵種の確認もお願いします」

「分かった。少し時間が掛かるので待つてくれ」

カイザーは走ってバルカン兵の元へ向かっていく。

20分後兵種の確認が終わったらしくカイザーの元へ向かった。

「フレッド殿、確認が終わりましたので来てください」

カイザーの報告によるとバルカン兵1010人、先ほどの戦いで投降した兵士を加えると1184人が仲間になった。

剣兵213人

槍兵327人

弓兵212人

騎兵332人

という内訳だった。

「ジャックちよつと来てくれ」

1つ、疑問に思ったことがあるのでジャックを呼んだ。

第33話

「なぜ、お前は今ここにいるんだ？ 俺は、バルカンの援軍がないように見張つとけといったはずだが……」

「すいません。でもちゃんと兵には見張らせております」

「じゃあ、今引き連れている兵は何だ。100人ぐらいしかいないから部隊の一部分なんだろう？」

「いいえ、この兵達は近くの町にいたバルカン軍に抵抗していた人たちです。300人ほどいたので連れてまいりました」

「なるほど、他の人たちはどこにいる？」

「私たちの兵と一緒にいます」

「それで、兵種の内訳は？」

ジャックの後ろから1人の兵が出てきて説明を始めた。

この部隊は313人いるらしく、その全員が分類的に言つと剣兵に入るのだった。

「じゃあフレッド様、ここで失礼するぜ」

ジャックは兵士を連れて立ち去った。フレッドは、ジャックの背中を見つめる。

（これで、バルカン軍の敗残兵とあわせると約1400人の兵士が仲間になった。これで隊も最初の800人から2200人へと膨れ上がった。しかし、まだバルカンを倒すのには及ばない――）

あれこれ考えていると、ふとマイクの顔が頭に浮かんだ。

「待っててくれ、敵は必ず討つから……」

と呟き、ミツバの元へ向かい新たな兵を獲得したことを伝えた。

第34話

「ということは、兵士が2200人に増えたってこと？ それなら、兵数がどれだけあるか調べなきゃ」

「いや、もう調べてある……というか、元の兵の数と増えた兵の数を覚えているから調べなくていい」

ミツバに向けて頭の中に入っている兵の情報を喋る。

「良く覚えてるね。私じゃ無理だよ」

「いや覚えるのは簡単なんだが、計算するのがどうも苦手で、その言葉と同時にすべての情報を言い終わる。」

「フレッド、これで全部言った？」

「ああ、言い終わった」

「ちよっと待ってね、もうすぐ答えが出るからさ」

フレッドは驚いた。暗算で答えが出るとは……

「フレッドいい？ 今から結果を言うよ」

ミツバの言った数をフレッドは覚える。ミツバの計算だと

剣兵626人

槍兵427人

弓兵612人

騎兵332人

輸送兵100人

衛生兵100人

合計2197人

という結果だった。その時、カイザーがやってきた。

第35話

「そういえば言い忘れてましたが、ちゃんと戦闘が終わったら報告に行かなきゃいけないんですよ。戦いの途中だったら文面で、戦いが終わっていたらじかに会いに行かなければならないんですよ」

「じゃあ、今からリオーネに向かうと全軍に伝えてきてください」
「分かりました。今すぐ向かいます」

カイザーは急いでジャックやミツバの元へと向かった。

20分後、ジャック以外の部隊はすべて集まったが何分待ってもジャックとジャックの部隊約500人が到着しない。このままでは、リオーネにつく日が1日ほど遅れてしまう。

「早く来ないかな……なにをやってるんだジャックは」

その時、ジャックの息を切らした声がした。

「ハア……ハア……、フレッド様……すまない。新しく入った兵達が出発する前に……兄弟や親たちと会いたいといっていたので付いていたら……遅れちゃった」

「理由は分かった。ジャックさつさと立ってすぐ出発するよ」

「ちょ……ちょっと待ってください……少しだけ休憩……いや、呼吸を整える間をくれないか？」

「ああ、そのくらいならいいぜ」

ジャックは何回か深く深呼吸をした。

第36話

しかし、フレッドは

——なぜ、フレッドは息を切らしているのに、集めた兵士は息を切らしてないのか——

と疑問に思った。その真相を明らかにするために1人の兵士に質問する。

「なんで、走ってきたのに息が切れないの？」

「みんな、いつも戦場で戦闘中に息を切らさないようにするために鍛えてるからです。そうすれば、戦場から逃げるときにも役に立ちますし」

「具体的にはどうやって鍛えてるんだ？」

「毎日走ることでですね。私達は部隊の連絡とかで走り続けていたからだと思っています」

「そうか、分かったありがとう」

フレッドは礼を言い、ジャックのところへ戻る。

「どうだジャック、出発できそうか？」

「ああ、もう大丈夫だ。時間取らせて悪かったな、じゃあ、出発しようぜ」

そうは言っているものの、ジャックの呼吸はまだ荒いままだし、肩で呼吸しているようにも見えた。フレッドは先に進むか、もう少し休憩させるか悩んだ。

しかし、答えはすぐに出了た……いや、出したといったほうが正しいだろうか。なぜなら、考える時間があるならば行動したほうが早いと思ったからである。

「分かった。ジャックすぐ出発する準備はいいか？」

「ああ、準備はできてる。出発はいつでもいいぜ」

その言葉を聞き、兵達の方角に向き直り大声で叫ぶ
「みんな、リオーネに向けて出発する。準備はいいか」

そういつと、兵達から歓声が上がった。

「では、レグラさんここで失礼します」

そういつて、フレッドは頭を下げリオーネに向けて出発した。

第37話（前書き）

こんばんは、桜坂 洋です。

ソロモンの読者の皆さん今まで読んでいただきありがとうございます。

私のお気に入りのstrange huntsがアクセス数1000突破したらしいです。

ソロモンより数倍面白いので、そちらのほうも読んでみていただけないでしょうか

では、ソロモンをお楽しみください。

第37話

リオーネに戻るのには6日掛かった。フレッドは着いてすぐに謁見の間に行き、ジャンに会い戦闘の報告をした。

「フレッド殿良くやってくれた。急に言ったことなのに、ここまで成果を上げてくれるとはありがたい」

そして、カイザーの方向を向いた。

「おまえがカイザー……レグラの息子か？」

「はい。ジャン様、父がいつもお世話になっております」

「いやいや、そこまでかしこまらなくていい。レグラにはいつも活躍してもらってるからな」

「その言葉、父に伝えておきます」

「ああ、よろしく頼むぞ。それで、フレッド……」

ジャンはフレッドの方向に向き直る。

「今回の褒美はここにおいてある。普通は戦闘が終わったときに手紙に内容を書いて送った後に来るのが常識なんだが、こんな功績を立てると思っていなかったから言わなかったんだ。すまん」

ジャンは頭を下げる。

「しかし、今回はレグラが手紙を送ってくれた。フレッド、レグラに会ったら礼を言つといたほうがいいぜ」

「そうですか。分かりました」

「さあ、褒美を受け取ってくれ」

そついい、小袋を3袋渡された。

第37話（後書き）

GWだと言うのに、遊ぶ暇が無い。

小説を書く暇も無い。

という状態の作者です。

何故かというと、GW明けに中間テストがあるからです。

そんなわけで、中間が終わり次第行数が増えていくと思います。

これからも「ソロモン」以下他作品をよろしく願います

第38話

「フレッド殿、一応説明しておく。小袋は5000ガロン、中袋は10000ガロン、大袋は50000ガロンが入っている。今回は1300人の兵士を倒したから金は、13000ガロンのはずだが、残りの2000ガロンは初陣で活躍したボーナスみたいなものだ」

「ありがとうございます。では今日はここで――」

「ちよつと待て、傭兵を雇うところを教えてなかったな。歩兵はこの城の1階、弓兵はこの城の前の建物、騎兵はその裏、槍兵はその隣にある。そして、その他はその道向かいだ。それと、おまえたちが寝泊りしているところにカイザーも泊めてやってくれ。少し狭くなるけどな、我慢してくれ。じゃあ、これからも頑張れよ」

「はい、これからもよろしくお願いします」

フレッドは外に出で、ミツバに話しかける。

「ミツバ、どの兵種を雇ったらいいと思う？」

「うーんとね。まずは輸送兵と衛生兵を増やしたほうがいいと思うよ。それなら槍兵を雇うところの前だね。さあフレッド、カイザーさんそれとジャックさん行きましょう」

ミツバを先頭にして傭兵申請所へと出発した。

「本当ですか？」

驚いている内容とは、

――兵を雇うのに掛かる金額――

についてであった。輸送兵は1人雇うのに金60ガロン、衛生兵は1人雇うのに金80ガロン掛かるらしい。

「どうするミツバ？ 誰をどのくらい雇う？」

「うーん、兵糧のことも考えなければいけないし……ところでカイザーさん1ガロンで、何人の兵士の1日分の食料になるの？」

「大体だが、兵士20人分が1日食べる量が1ガロンぐらいだが…

…」

「ということ、今私達の隊には約2200人いるから、1日110ガロンが必要ね。1ヶ月戦うことを想定すると3300ガロン。使えるのは多くても11000ガロンぐらいね」

ミツバは黙り込み、思考を開始する。

第39話

「じゃあ、輸送兵100人と衛生兵50人を雇いましょう」

「ちよつと待ってくれ」

その言葉を発したのはカイザーであった。

「いや、待ってくれ。雇った兵の食料が計算に入っていないと思うんですが……」

「なるほど……それがあつたわ。ありがとうカイザー」

ミツバは再び思考を開始した。

「じゃあ、輸送兵80人と衛生兵30人にしましょうか」

そういつて、ミツバは傭兵の申請を始めた。

30分後、傭兵申請の手続きが終わりミツバが戻ってきた。

「兵達が来るまでに2時間程掛かるらしいよ。フレッド、カイザーさん、武器を鍛えることとか必要でしょ？ 時間つぶすために街に行つてやりたいことやりましょ」

フレッドはカイザーを見る。カイザーをこちらを見てたらしく頷いて返した。

「分かった。じゃあ、早速出発しようよ」

フレッドは街中へ向かつて出発した。

1時間半後フレッド達は早めに傭兵申請所に向かった。

第40話

「フレッド、どんな人たちが来るのかな？」

「多分、ちゃんと仕事をしてくれる人だとは思っただけど……」
期待と不安を胸に秘めながら傭兵申請所の扉を開いた。

「こんにちは、あなたがフレッド様一行ですね。まだまだ新米ですけどよろしくお願いします」

中にいたのはフレッドやミツバと同じ年ぐらいの少年だった。

「私の名前はクロフォードです。よろしくお願いします」

ミツバが疑問に思っただけで質問する。

「ところで、あなたは衛生兵の部隊長？ それとも、輸送兵の部隊長？」

「それは――」

クロフォードの口から意外な言葉が返ってきた。

「――両方共です。私たちの部隊には輸送兵100人と衛生兵40人がいます。御用達は輸送兵80人と衛生兵30人でしたが残った人たちが心配だったので残りの30人も連れてきました」

「それは無料で雇っていいのですか？」

「ああ、そうです。こちらからのサービスみたいなものなので」
フレッドはクロフォードに向けて頭を下げた。

第41話

「ありがとうございます。こちらは兵が増えるので助かります」

「いえいえ、残った兵たちが心配だったのでこちらもありがたいです。なので、礼なんていわなくても……」

その時、扉が開く音と共に1人の兵士がフレッドたちの前に転がり込んでいた。

「フレッド様、ジャン様から伝言です。今、ロンド城にバルカン軍が攻め込んできたので、急いで応援に向かってください。とのことです。それとこれを」

兵士は箱をフレッドに渡してくる。

「この箱の中身は、ロンド城周辺の地図と20000ガロンが入っています。兵糧代に使えるとのことですよ。ではここで失礼します」

そういつて兵士は去っていった。

「クロフォード殿、悪いが兵を集めて1時間後に出口に集合してくれないか？」

「分かりました。すぐ兵士に伝えてきます。ではまた後で」

クロフォードは傭兵申請所から急いで出て行った。

「ミツバ、ジャックに兵を集めて1時間後出口に集合してくれ。と伝えてくれ」

「分かった、すぐ出発する。全兵士を連れてくということでもいいよね？」

「ああ、そう伝えておいてくれ。それとカイザー殿」

「はい、何ですか？」

「先にロンド城に行って、敵の数を探ってきてくれ」

「はい、分かりました。では、今から出発します」

ミツバとカイザーも急いで傭兵申請所から出て行く。

「俺も準備しないと……」

フレッドはゆっくりと傭兵申請所から出て行った。

第42話

1時間後出口にはフレッド、ミツバ、ジャック、クロフォードそして兵士約2350人程が集まっていた。

「皆、ロンド城にバルカン軍が攻めてきた。我が隊は今からロンド城に行つてバルカン軍を殲滅する。ちなみにカイザー殿には先にロンド城に行つてもらい、バルカン軍の戦力を調べてもらっている。では皆出陣だ」

「「「おおおおおおおお」」」

兵士達から歓声が上がる。

「ミツバ、ジャック先頭に行き、兵たちの士気を揚げてくれ」

「分かった。ミツバ様行きましょう」

「そしてクロフォード殿」

「何でございましょう?」

「輸送兵に兵糧を持たせて隊の中央に陣取らせてくれ」

「分かりました。今すぐ行動させます」

(これで準備はすべて整った。これで出陣できるぞ)
とフレッドは心の中で思った。

第42話（後書き）

明日、更新できないかもしれません。

読者の方すいませんです。

第43話

そして……

「出発」

高らかに声を上げ兵達を出発させた。

ロンド城に着いたのは、5日後のことであつた。

「カイザー殿、敵の戦力は分かりましたか？」

「はい、バルカン軍の戦力は約4000人ほどでした。そして、ロンド城には4500人ほどの兵士がいるそうです」

「敵に将はいるのかい？」

「はい、敵には1000人の兵士をまとめる将が2人、2000人の兵士をまとめる将が1人います。将の事を調べてみたのですが特に武勇があつたり、知略を張り巡らせたとは思えないらしいです」

「そうですか、助かりましたカイザー殿」

「いえ、また情報を探りに行つてきます」

「お願いしますカイザー殿」

そついうと、カイザーは馬に乗ってロンド城へと向かつていった。

第44話

「ミツバ、どこにいる？」

「どうしたのフレッド？」

「頼みたいことがあるんだが、頼んでいいか？」

「いいよ、で何をすればいいの？」

「前回と一緒にだ。 Rond 城に行つて挟み撃ちに出来ないか聞いてくれないか？」

「分かった。すぐ出発するよ」

ミツバは Rond 城に向けて出発した。

カイザーが戻ってきたのは2時間後の事であつた。

「カイザー殿、ただいま戻りました」

「それで、分かったことは何かあるのですか？」

「はい、まず今から約5時間後に補給部隊が来るそうです」

「兵士の数は？」

「2300人らしいです。その4時間後に3500人の兵士が援軍としてくるそうです」

「なるほど……9時間後には敵の兵士の数が約10000人に膨れ上がるということか……」

「どうしますフレッド殿？」

「ミツバが帰ってくるまで待機ということにしてくださいませんか？」

「分かりました。では、ミツバ殿が着いたらお知らせください」

カイザーは自分の陣へと戻っていった。

第44話（後書き）

ソロモン以外の投稿が遅くなっております。

読者の方すいません。

古泉氏と同じくテストで忙しいので投稿……いや書く暇が無いので
す。

これからも、桜坂の作品をよろしくお願いします。

第45話

30分後、ロンド城から帰ってきた。

「フレッド、ロンド城主からの伝言で1時間30分後に内外から挟み撃ちにしよう。と言ってたよ。ところで、バルカン軍は大きい円を描くように広く陣取ってたから、持久戦に持ち込もうとしてると思うんだけどフレッド何か知ってる？」

「さつきカイザー殿が言ってたんだけど約5時間後に補給部隊が2300人その4時間後に3500人の兵士が援軍としてくるそうだし9時間後には敵の兵力が10000人に膨れ上がるのね。じゃあ、さつさと決着をつけなきゃ危ないよ」

「ああ、僕もそう思っている。ミツバ、カイザー殿とジャックそれにクロフォード殿を呼んできてくれないか？」

「分かった。ちょっと待ってて」

そういつて、ミツバは皆を呼びに行った。

皆が集まるのにはそれほど時間が掛からなかった。フレッドはその間に兵士を呼びロンド城にいつて、作戦実行をするということ伝えてくれ。と頼んでおいた。

第46話

「フレッド、ちゃんと言われた人を呼んできたよ」

フレッドは皆を見回しながら言う。

「皆集まったか？ 今から、状況の説明をする」

「フレッド様、状況説明って何だ？」

ジャックが声を上げる。クロフォードもそう思っていたらしく、頷いていた。

「先ほどミツバをロンド城に、カイザー殿をバルカン軍と辺りの情報収集させていたところ、ミツバからは今から1時間30分後に、ロンド城内の軍と我らの軍で挟み撃ちにしよう。という提案があった」

「それでそれは提案は受けたのですか？」

「もちろんだ。なぜなら、カイザー殿の仕入れてきた情報があったからな」

「その情報とは何ですか？」

「カイザーとミツバは知っているが約5時間後に補給部隊が2300人その4時間後に3500人の兵士が援軍としてくるそうだ」

「敵の兵力が10000にまで膨れ上がりますね」

「そうだ。それに気が付いているかどうか知りませんがこのまま行くと我々が負けることになるからな」

「それなら、兵士全員に準備をさせておきましょうか」

「ああ、頼む。僕から話したいことは以上だ。何か意見はあるか？」
皆は首を横に振る。

第47話

「出発は早めにするから1時間後に出発することを伝えてくれ」
ジャックは兵士に伝えるため出て行つた。

時は進み、1時間後、兵士約2300人全員が集合した。

「我々は今からバルカン軍の殲滅を開始する」

フレッドが声を上げると兵士たちから歓声が聞こえる。

「決戦は30分後だ。皆出発するぞ」

フレッド達は高らかに進軍するのであった。

戦闘が始まったのは10分後のことであつた。森から抜けて少し歩き休憩しようとしたときのことであつた。しかも、なぜか戦闘場所ではバルカン軍が陣を張っていたところとフレッドの隊の真ん中であつた。しかもその時バルカン兵が謎な言葉を発していたのである。

——何故おまえらがここにいる。奥地で陣を張っていたんじゃないのか——

と

「何言ってるんだお前、まあいい倒してから話を聞くことにするか」
ジャックが剣を取り出す。そして戦闘が始まった。

ジャックが率いる弓隊がバルカン兵を後方から攻撃し、カイザー率いる剣兵+槍兵が前方で、騎兵は他から援軍が来ないかの偵察という役割であつた。

「ジャック、どれぐらい敵がいるか分かる？」

「ちよつと待つてくれフレッド様今から調べてくる」

ジャックは敵の方向へ走っていった。

少し経つた時少し前方で戦闘が始まったことを聞かされた。その時、バルカン兵3人がフレッドの方向に向かつてきた。

第47話（後書き）

久々の投稿です。

お待たせしてしまいました。

第48話

その時、バルカン兵3人がフレッドの方向に向かってきた。

「貴様が敵の大將か。何故我々が攻めてくることが分かった？」

「そつちこそ、何で知っているんだ」

「教えてもらったんだよ。おまえの軍のだれかになあ」

薄気味悪く奇妙に笑う。

「誰なんだ、言え」

フレッドは剣を振りかざす。

「誰が教えるか。自分で探せよ自分の軍なんだしな」

バルカン兵も剣を取り出し振り下ろす。フレッドはそれを剣で受け止める。打ち合うこと数合バルカン兵の剣が吹き飛ぶ。

「大丈夫か？」

バルカン兵が剣を飛ばされた兵を庇う様にフレッドの前に出てくる。

「フレッド大丈夫？」

バルカン兵と対峙していたミツバが戻ってくる。ミツバがいた方向を向くと先ほどまで対峙していたバルカン兵が天を向くように体から血を出して倒れていた。

「フレッド気をつけて。来るよ」

フレッドは振り向くとバルカン兵が剣を持ち直していた。

「くつ、ここは退却するぞ」

バルカン兵達は戦闘が起こっているところへと退却した。

第49話

「我々の隊に裏切り者がいるだと……」

「どうしたのフレッド？ 裏切り者がいるって」

「さっき出会った兵士が言っていた」

「前の戦いでこちらに下った兵士が裏切ったんだと思うよ。それより、この戦いに集中しようよ」

「ああ、そうしたほうがよさそうだな、今悩んでも何の解決にもならないしさつきみたいな奴が襲ってくるかもしれないからな」

前線の方向を見ると、圧倒的にフレッドたちが押していた。しかし、一つだけ謎が出てきた。

——何故こんなにあっさり敵を打ち破れているのか——

もし、敵がフレッドの陣に攻め込もうとしたならそれなりの兵を集めているはずだから、こんなに簡単に優勢になるはずが無い。

それなら、何故敵はもろく崩れるのか、

まず、理由として一つ目に挙げられるのは二手に分かれて前後から攻めること、二つ目は伏兵を張っていること、三つ目は罠があること、どれにしても隊が危険になる。

その時、クロフォードがフレッドのところに来た。

「フレッド様、敵が後退しています。どうしますか？」

「周りの状況を確認してくれ」

「了解、では行ってまいります」

クロフォードは自分の傭兵全員を率いて探索に出かけた。

第50話（前書き）

今回は短くてすいませんでした。

第50話

20分後、クロフォードは探索を終えたらしく戻ってきた。

「フレッド殿、敵は見当たりませんでした。罨の様子も無いようです」

「そうですか、助かりましたクロフォード殿」

フレッドはミツバの方向に向き直る。

「ミツバ、カイザー殿に出撃するように伝えてくれ」

そして、一枚の紙をミツバに渡した。

「それとこの紙をカイザー殿に渡しといてくれ」

「分かった。すぐ渡してくる」

そういつて、ミツバはカイザーの元へ出発した。

しかし、10分後事態は急展開を見せることになった。

第51話

「フレッド大変よ」

息を切らしながらミツバが走ってきた。

「どうした。何があった？」

「カイザーの部隊が伏兵に囲まれてたわ」

「なに、それは本当か？」

「ええ、カイザーに出発することを伝えて戻ろうとしたときだったわ」

フレッドは、クロフォードの方向を向く

「クロフォード、伏兵がいたじゃないか」

その時クロフォードの口から驚くべき言葉を耳にした。

「そりゃそうだろうな、俺が置いとけて命令したんだから」

「はい？ クロフォード殿、もう一度言ってもらえませんか？」

フレッドは聞き間違いだろうと思い、もう一度聞きなおしてみる。

しかし、返ってきた言葉は

「俺が兵を置けと命令したから当たり前だと言っただ」

さきほどと同じ内容だった。

「何でそんなことをするんだ」

フレッドは叫ぶ。

「何故かってか……それはな——」

フレッドは唾を飲み込んだ。

——俺がバルカン軍の将だからだ」

第52話

その言葉と同時に、フレッドは周りの兵500人ほどに剣を突きつけられた。

「くっ、おまえがバルカンの将というのは本当なのか？」

「ああ、しかもバルカン騎士団長パブロ様の直属の配下だ」

その時、フレッドの口から笑みがこぼれた。

「な、何がおかしい。おまえは周りを囲まれているんだぞ」

「しかし、その周りをカイザーたちが囲んでいる。もし、殺せたとしてもその後どうするんだ？」

「ふん、伏兵に出会って混乱している隊を倒すなんて簡単すぎるぜ」
「本当にそうかな」

フレッドが言い途中に弓の矢の放つ音が鳴る。矢はクロフォードの兵に刺さった。

「だ……誰だ、そこで弓矢を撃つたもの出て来い」

その時出てきたのはジャックだった。

「どうしておまえがここに？ 伏兵に遭っているはずじゃないのか」
その言葉を聞きジャックが声を上げた。

第53話

「まだ気付かないのか？」

「気付くって、何にだ」

「おまえはフレッド様に踊らされてるだけということを」

「踊らされてるだと……どういうことだ」

「さつき、フレッド様から渡された紙にクロフォード……おまえが裏切る可能性があるから注意しとけ。それと伏兵がいるはずだから気をつけると書いてあったんだ」

クロフォードはフレッドを見ながら舌打ちをした。

「しかし、フレッドの命はこちらが握っている。下手に動くとフレッドの命はないぞ」

「果たしてそうかな……」

「なんだと、理由を言ってみろ」

「この周りには弓兵がおまえらのことを狙っているんだ。弓矢を放つてからだとお前達はフレッド様を殺すという反応できないぜ」

「それでも、お前らの矢がフレッドに当たる可能性があるじゃないか」

「ふん、こっちの兵は何年間も弓兵として戦って来ているんだ。目標をはずすことは無い」

その時クロフォードが高らかに声を上げた。

「皆、弓矢を恐れるな。フレッドを殺せ！！」

フレッドの周りを兵が囲んできた。しかし、その兵達はジャック率いる弓兵の矢によってどんどんやられていく。

第54話

「フレッド話がある。ちょっと聞いてくれないか？」

「なんだクロフォード、降伏しようってか」

「違う。大将同士一騎打ちで決着をつけようという提案だ。どうだ受けるか？」

「なぜ、こんな優勢の地位にあるというのにわざわざ負けの確率が上がるようなことをしなければいけないんだ？」

「怖気づいたのか？ それは、大将としての名が泣くぜ」

クロフォードは分かりきったような挑発をする。

「そこまで言うのなら受けてたつぜ」

「フレッド様、どうしてそんな挑発に乗るんだ」

「そうよフレッド、挑発に乗らなくたって勝てるじゃない」

ジャックやミツバがそれぞれフレッドを諷める。しかし、フレッドから帰ってきた答えは先ほどと同じだった。

「ああ、そうだろうな。それでも俺は一騎打ちを受けて立つぜ」

「どうして？ そんなことして意味はあるの？」

「意味か……」

すぐにフレッドの口から答えが出てきた。

「まずは、自分の腕がどのくらいか知ること。それに矢の無駄遣いを押さえることだな」

「そんなことのために負ける確率を上げるの？ 腕を知るなら、カイザーとかジャックとかとやればいいじゃない」

「それじゃあ、相手が本気かどうか分からないから嫌なんだ」

フレッドは剣を抜き、クロフォードと対峙する。

第55話（前書き）

作者のPCが壊れてしまいました。私には携帯という機器がないのでPSPのインターネットブラウザーから投稿しております。読みにくいと思いますがご理解の方よろしく願います。

第55話

「いくぞ、クロフォード。僕の攻撃を受け損なうなよ」

フレッドは持っている剣を構えた。その時、クロフォードが声を上げた。

「ちょっと待った、一つ確認しておきたい事がある」

そう言うと、クロフォードはフレッドに背を向けてジャックの方向を向く。

「ジャック、この俺とフレッドとの一騎打ちにお前とお前が従えている兵士が手を出さないと言うことを約束しろ」

「ああ、分かったよ。でもその内容をお前の兵士達にも伝える。自分の兵士に一騎打ちを邪魔させる気か？」

クロフォードはバルカン兵達にも同じ内容をジャックに聞こえるように大声で言う。

「これで、いいかジャック？」

「ちゃんと聞いたぜ。じゃあ俺も兵士達に注意しておくぜ」

ジャックは自分の兵士達の方に振り返り、兵達に一騎打ちの邪魔をさせないように言い含めた。

「これでいいか、クロフォード？」

「俺もちゃんと聞かせてもらった。これで邪魔が入る心配が無くなったからな一騎打ちに集中できるぜ」

クロフォードはそう言って、フレッドの方向に向き直り、剣を抜きフレッドからの攻撃に備えた。

「じゃあ、行かせてもらうぞ」

フレッドはクロフォードに向かって駆けていった。

第55話（後書き）

PSPからの投稿なのでここまででPSPの限界にきてしまいました。ちなみに所要時間は約一時間ぐらいでした。これからも頑張るので応援よろしくお願いします。

第56話（前書き）

久しぶりの投稿になってしまいました。読者の皆様迷惑をおかけしましたこと、誠に申し訳ありません。すいませんでした。

第56話

そしてクロフォードに攻撃した。

「さすがですね……しかし、こんな攻撃で私が倒せるとでも？」

クロフォードはフレッドの攻撃をバックステップであっさりかわす。

「それではこちらの番だ。おまえは受けきることができるかな？」

そういうと、クロフォードは地面を強く蹴り、ぐんぐんフレッドに迫り左右とコンビネーションを繰り返す。

「くっ……いつ終わるんだこの攻撃は」

フレッドはクロフォードの攻撃を受けるので精一杯である。

「この攻撃を受けているだけじゃおれには勝てないぜ」

（どうすればいいんだ……）

その時、剣が弾き飛ばされそうになる。

（手から力が抜けてきた……このままじゃジリ貧だ。どうしようか……）

フレッドは必死に考える。そして……金属の鈍い音がした。そう、フレッドの剣が弾き飛ばされたのだ。

第57話

クロフォードはチャンスだと思い思いっきり剣を降る。

しかし、大振りになった一瞬の間を見て、フレッドは剣の飛んでいった方向へと下がって距離をとる。

「ちっ、焦って大振りになっちまった。しかし、次はないぜ」

「それはこっちのセリフだよ、クロフォード」

フレッドは落ちた剣を拾いまたもクロフォードと対峙する。

「攻撃はこれで落ち着いたんだ。こっちから行かせてもらう」

フレッドは、クロフォードに向かって駆けて行った。

「また避けてやるよ。かかってこいよ」

フレッドは剣を突き出す。

「くっ……これは避けられない……」

クロフォードは剣で受けた。剣と剣とがぶつかる。

「先程は力負けしたが、この態勢からなら力負けすることはない」

「仕方ない……このまま負けるよりはましか……」

クロフォードはバックステップをして避ける。

「その行動は読んでるよ」

フレッドはクロフォードを追うために地面を蹴った。

第58話

「なにっ……」

クロフォードは一瞬驚いた顔をしたが、フレッドの攻撃に備えるために剣を構える。

またも、金属のぶつかる鈍い音が鳴った。

両者ともに最大の力を込める。今度は、両者の剣が飛んで行った。「フレッド、おまえのどこにこんな力が残されているというんだ」クロフォードはバックステップをしてフレッドと距離をとり剣を拾う。それと同じようにしてフレッドも剣を拾う。

そして、剣を持ち上げクロフォードを向いたときクロフォードが叫び声をあげて倒れた。急いで近寄ってみると胸に矢が刺さっていた。そして、奥を向くとジャックが弓を構えて立っていた。

「ジャック、なんでクロフォードを攻撃した。手出しはしないという約束だっただろ」

「そんな約束は一時の気休めでしかありません。しかもこのまま続けていたらフレッド様、あなたが負けていたのですよ」

「そうかもしれないけど……」

「しかもあなたが死んでしまったらこの軍を誰が統率するのですか」ジャックがそう言葉を発した時、奥から声が聞こえてきた。クロフォードがやられたことを知って怒り任せに攻撃してきたのである。

第59話

そのときジャックは右手をふり上げる。

すると、茂みに隠れていた弓兵達がバルカン兵に向かって矢を射る。矢はバルカン兵へと向かっていった。そして、数分後バルカン兵は全員無残な姿で倒れたのである。

「さて…… ロンド城へと向かうぜ。いいなフレッド様？」

「あ…… ああ…… 皆…… ロンド城へ…… 出発だ」

「フレッド様落ち込んでいたら兵の士気にかかわる。今は、気持ちを奮わせてくれ」

「ああ、しかし……」

フレッドはクロフォードの亡骸を見た。そうして少しの間、亡骸となったクロフォードを見つめる。

「フレッド様、早く行かなければロンド城が落ちてしまっぜ」

フレッドは振り返り、再び言う。

「皆、ロンド城へ出発だ」

「…… おおおおおおつつつつつつ」

兵士たちから歓声が上がる。フレッドはそれを聞きロンド城に向かった。

第60話

途中でミツバやカイザーと合流し、ロンド城に向かう。その際ミツバにクロフォードの事を聞かれた。

なので先程起こったことについて、何も隠さずミツバとカイザーに説明した。

「嘘でしょ……クロフォードが敵だったなんて」

それを聞きミツバは相当落ち込んでいた。

そして、進軍してロンド城につくと驚く光景が見えた。

ロンド城の周りにバルカン兵の姿がまったく見えないのだ。

「カイザー殿どう思う？ これは異じやないのか？」

「まだ分かりません。しかし、少しずつでもロンド城に前進しなければいけません。敵からの援軍が来ますし」

フレッドは決断する。

「カイザー殿、全軍に伝えてくれ。今からロンド城に向かうと」

「はい、分かりました。全軍に伝えてきます」

カイザーは全軍に伝えるために兵士を振り分けて伝えに行かせる。5分後、全軍に伝わった軍をロンド城に出発させた。

第61話

ロンド城につくと、一人の騎士が立っていた。

「フレッド様ですね。援軍をお待ちしておりました。どうぞこちらへ」

ロンド城の扉が開かれ、中へ案内される。フレッド達はロンド城の門をくぐり、案内された場所へと向かう。そこには、一人の男が椅子に座っていた。

「あなたがフレッド殿ですか……よく来てくれました。ありがとうございます」

椅子に座っていた男は立ち上がり、フレッドに近づく。そしてフレッドと握手をした。

「早速ですいませんが、このロンド城にバルカン軍の援軍が来るらしいんですよ」

カイザーが声を張り上げた。

「その情報はもう獲得してあります。先程、知ったばかりですけど男は矢継ぎ早に聞く。様子を見てみると、とても焦っているようだった。」

「どこから、いつ、どれぐらいの兵力で来るんですか？」

それをカイザーは的確に返していく。

「約5時間後に補給部隊が2300人その4時間後に3500人の兵士が援軍としてくるそうです。しかも、先程の戦いで逃げ去ったものも含めると約8000人ぐらいで攻め来るものだと思います」

カイザーが言葉を続ける。

「それに対して、我が軍はロンド城にいる4500人と先程の戦いで無傷だった2000人を合わせて約6500人程度です」

「フレッド殿、どうしたらいいと思いますか？」

男はフレッドに質問する。

第62話

「ロンド城外で戦えば勝ち目はないかもしれませんが、ロンド城内で戦えば大丈夫です。ですが、先程みたいに包囲されては食料がなくなり困ることになります。ですから、6500人の兵士を2500人と4000人に分けて、2000人を城外で駐屯させるという手が有効だと思います」

「しかし、敵がこの城に攻めてきた場合どうなるんだ？ そのところを考えているのかフレッド様？」

ジャックが声を上げる。

「ああ、昔からグランの言い伝えに攻者3倍の法則というものがあるんだ。城を攻めるときは兵力を3倍にしないと城は落ちないし、落とせないという言い伝えだ。昔より武器が強くなってるから今は、2倍ぐらいだろうけど、ロンド城4000、バルカン軍8000だつたらまず大丈夫だと思うよ」

「それと、外に駐屯してる部隊が見つかったらどうするんだ？」

その時、カイザーが声を上げた。

「それはこちらで対策を立てておきますのでご安心を、フレッド殿、その策で行きましょう」

「カイザー殿、策とはなんですか」

「すいませんね。それは教えられません。もし、敵にでも伝わったらこの策は失敗してしまうのですから」

「分かりました。ではその時をお待ちしておりますよ」

「お任せくだ——」

さい、と言おうとしたところで天井裏から物音がした。

「なんだ、誰がいるんだ？」

ジャックは外に行き天井裏を確認しようとしたとき、黒ずくめの男が出てきて、ロンド城門のほうへと逃げ去った。

「フレッド様、追わせてもらうぜ」

そういつと、ジャックは黒ずくめの男を追いかけて行った。

第63話

しかし、フレッドは心の中でとても嫌な予感がした。それも、今までにないほどの大きなものだ。

「ミツバ、カイザー殿、この場は頼みましたよ。何かしらの嫌な予感がしたのでジャックを追います」

カイザーもフレッドの考えに賛同する。どうやらカイザーもなにか、嫌な予感がしていたらしい。

「分かりました。私も嫌な予感がしています。この感じは多分ジャック殿の身に危険が迫っていると思います。フレッド殿、どうか気をつけて、そしてジャック殿の周りをよく注意して見ていて下さい」

「分かりました。カイザー殿忠告ありがとうございます」

フレッドは、ジャックを追いかけて行った。

しかし、ジャックはとても速く、姿を見失わないようにするので精一杯である。

ジャックも精一杯追いかけているのにもかかわらず黒ずくめの男に追い付けない。追いつきそうになっても、いつの間にか離されていた。

「くそっ、あいつはどこだ……」

ジャックは焦っていた。自分の足の速さが負けたことをそうであったが、作戦があることを知られてしまえばこの戦に勝ち目が無くなる。

「何なんだあいつら、まるで人が入れ替わってるように離れやがって……」

ジャックは焦りながら黒ずくめの男を追いかけるためにスピードをさらに上げていった――

――それと同時期にフレッドはジャックの姿を見失っていた。

第64話

「あいつ等どんだけ早いんだよ……ハアハア……このままじゃ体力が尽きてしまう。一回休憩だ」

そう言ってフレッドは腰を下ろした。その時、目の前で黒ずくめの男とジャックが通り過ぎて行った。

「あいつらより先に来ていたのか……そりゃあ、疲れるはずだ……」
しかし、その考えにおかしいところを発見した。

——なぜ、ジャックを追いかけに行ったのに追い越せるんだ——
その考えにたどり着いたとき一つの結論に達した。

あいつらは、同じところをぐるぐると回りながら少しずつ進んでいるということに、しかも、その事に気がつくとさらにもう一つ疑問が浮上した。

——なぜ同じところをぐるぐる回っているんだ——

そのとき、さっきのカイザーがしゃべっていた言葉を思い出した。
「そういえば、何か嫌な予感がするとか言ってたな……俺もだったが……それに、ジャックに身の危険が迫ってるとも言ってたな……」

フレッドは思考を開始した。そして数分後、ひとつの回答にたどり着いた。

「あいつら、何かの為に時間稼ぎをしているんだな……あいつらの向かってる方向は……俺達が入ってきたあの門か……行く場所が分かればなんとかなる……早く行かなければ……」

少し休憩したので、体力を回復したフレッドは急いで城門へと向かった。

数分後城門につくと異様の光景を見たのである。そしてフレッドは見た光景によって今までの謎が解けたのである。

第65話（前書き）

すいません。

久しぶりの投稿になってしまいました（汗

夏休みの宿題や旅行で書く暇が……

その間にアクセス数が10000突破しました

読者の方々このような小説をお読みいただき誠にありがとうございます
ます

これからも宜しくお願いします

第65話

何と城門の上に黒ずくめの男が5人ほど弓を構えて立っていたのである。それも、弓が向いている方向はジャックを誘導している方向と同じだった。

「なんとかしないとジャックが弓の餌食になってしまう。しかしどうするか……」

その時ふと頭に浮かんだのが城門の上にいた兵士の事である。

——あいつらが目を覚ましたら——

そのとき二つの作戦が浮かんだ。しかし、どちらの作戦もフレッドまたはジャックの命に危険が訪れてしまう。

フレッドは自分の命など、ほかの人が救えればどうでもいいと思っていた。しかし、この命が無くなるとミツバやジャックが悲しむ上にあの軍隊の統率者がいなくなるとかジャックが言っていた。

「しかし、ジャックを危険な目にあわせるわけには……」

しかし、考えている暇はない。考えるのに時間を取られているとジャックが弓矢の餌食になってしまう。しかし、フレッドはどちらの作戦をとるかが決断できないでいた。心だけ焦り行動できず、時間だけが過ぎていく。

「早くしないとジャックが来てしまう。仕方ない……俺が突っ込んで気を引くか……よし、行くか」

その時、黒ずくめの男がいたほうから悲鳴や剣と剣がぶつかる音が聞こえた。

フレッドは黒ずくめの男たちの方向を向く。すると、二人の男が黒ずくめの男たちと戦っていた。フレッドは戦っている二人の動きに見覚えを感じたが、今はその二人に加勢しなければいけないので急いで城門の上へと向かった。

第6話

城門の上に登って急いで二人の男の所へ向かった。二人組の所に着くと剣を抜き黒ずくめの男たちと対峙する。

「すいませんご助力ありがとうございます。今から私も手伝い……」
その男たちの顔を見てフレッドは驚いた。

「おいおい、フレッド俺達の事を忘れたのかよ」

そう、その二人組とは――

――シーザーとレクシオンであった。

「ところで、レクシオンさんとシーザーさんはなぜここに来たんですか？」

「それはな……ジャン様の命令で来たんだよ」

レクシオンは剣を振りかざしてくる黒ずくめの男に向かって、剣で突きながら言う。

「違うだろ……お前がどうしても行きたいって言ったから来たんだろ……俺は休みたかったのに……」

「本当に悪いなシーザー、後で愚痴は聞いてやるから、今はこいつらを倒そうぜ」

そういうと、レクシオンは黒ずくめの男たちの方向へ向かって走り出し剣を降りおろす。

「ふん、お前らの中に手ごたえのある奴はいないのかよ」

しかし、黒ずくめの男たちからは返答がない。なぜなら、すでに息を引き取っているからだ。

そのとき、残りの一人が城門に向かってきた。後ろにジャックを引き連れて……そう、ジャックが追っていた黒ずくめの男である。

「フレッド、あいつらも敵か？」

レクシオンがフレッドに聞く。

「ええ、そうです。ジャックに追われているのが……え、らってなんですか？」

レクシオンは左側に指をさす。

「あいつらも敵じゃないのか？」

フレッドはレクシオンが指を差した方向を向く。すると、そこには黒ずくめの男が4人が近づいてきている。

第67話

「レクシオンさん、シーザーさん、あの黒ずくめの男たちを倒していただけませんか？ ジャックが追っている男を倒してからすぐにそちらに向かいます」

「分かった。無茶をするなよ」

レクシオンはそう言うと、シーザーと一緒に黒ずくめの男たちに向かっていった。

フレッドは、ジャックが追っている黒ずくめの男を倒しに行く。

黒ずくめの男の前に立ち、剣を抜く。

「うん？……お前は……フレッドとかいうやつか？」

「ああ……そうだ。ところでお前は何者だ？」

フレッドは黒ずくめの男に聞く。すると、黒ずくめの男は一瞬で剣を抜きフレッドに向かって襲いかかってきた。

左、右、左、右と連続攻撃を繰り返す。しかし、クロフォードとの戦いで慣れたフレッドは剣で受け止めたり、かわしていく。

「なんだと、この攻撃をかわすのはクロフォード様ぐらいのスピードを持ってないとできないはず……」

「クロフォード……クロフォードと言ったか？　ということはお前も帝国の一員か……それがわかったなら手加減なんて必要ないな」それを聞くと黒ずくめの男は笑いだした。

「フハハハハ、今まで手加減していただと……笑わせてくれるぜ。俺を倒せるならやってみな……」

その時、ジャックが到着して後ろから弓を放つ。しかし、黒ずくめの男は死角から撃たれたのにもかかわらずあっさり避けた。

第68話

「ふん……そんなやわな攻撃で俺が倒せるとでも思ったか？」

黒ずくめの男はジャックの方向を向き剣を構える。フレッドはチャンスだと思い剣を降り下ろす。

しかし、それを見越していたのか剣で受け止める。そして、黒ずくめの男とつばぜり合いになる。

「ジャック、お前はレクシオンさんの所へ応援に行け。ここは俺が何とかするから……早くいけ」

「分かったぜフレッド様、すぐに向こうのやつらを片づけて、レクシオンさんと呼んでくるぜ。だから行ってくる」

その時、黒ずくめの男が倒れた。

「その必要はないぞフレッド」

そう、黒ずくめの男を倒したのはレクシオンだった。

「レクシオンさん、向こうの敵はどうしたんですか？」

「ああ、あいつらの事か？」

そう言つと、レクシオンは指をさす。

フレッドはその方向を向くと驚くべき光景を目にしたのである。

そう、そこには、切り刻まれて体中から血を出している黒ずくめの男たちの悲惨な姿があった。

そして、フレッドの目の前にいる黒ずくめの男も向こうにいる男たちと同じ姿になった。

「フレッド、黒ずくめの男を片づけるのを手伝ってくれ……ジャックとやら、お前も手伝ってくれないか？」

レクシオンは死体を持ち上げながらジャックに頼む。

第69話（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした。

期末テストが終わり、更新しようと思っていた矢先に親にPCを壊されてしまい20000文字ぐらい書き溜めしていたのがおじさんになってしまいました。

それで、ちよつと更新以上にソロモン自身を削除しようと思っていたましたが、先日家の掃除をしているとソロモンの原本を発見したので書き始めようと思いました。

こちらに投稿しているソロモンはオリジナルストーリーも混じっており、現在その最中でした。

なので、なるべく矛盾がないようにオリストを終わらせてからルーズリーフの内容を書き写しをしようかと思っています。

文章は稚拙ですし、ストーリーはまるつきりだめです。ですが、最後まで終わらせようと思っています。

最初のような毎日更新は無理かもしれません。話の内容を忘れてしまっているので矛盾点が多いかもしれません。ですが、一週間に1〜2回の更新でやっていこうと思っています。

もし、矛盾点を見つけれましたらご報告をしていただければ幸いです。かと思っています。

これから、このソロモンという作品をよろしくお願いします。

イカロス

第69話

「分かりました」

フレッドとジャックは頷き、黒ずくめの男たちの死体へと駆け寄る。その時フレッドに少しの疑問が湧いてきた。

「でも、レクシオンさん。何故死体を城に運んでいくのですか？」

「それはな――」

レクシオンは指でロンド城を指差した。

――ここロンドにいる住民に恐怖心を与えないためだ」

そう言つて、シーザーを呼んだ。

「もし、住民達の心の中に戦争が始まるという恐怖を与えると、これからの住民の生産意欲が削がれてロンドから逃げていく者も出てくるし、バルカンからのデマなどが流れた時に暴動や混乱が起きて、思った通りに敵からの攻撃を防げなかったり、包囲された時に一人一人勝手な行動をして援軍が来るまで戦えなかったりということが起きるからな。それに最悪の場合、バルカンの攻撃に内応して城門を開いて、バルカン兵を城門内に入れてしまうという恐れも出てくるといふわけだ。それにあれだ……こいつらも敵とはいえ、一人の人間だ。戦場じゃないんだから、こいつらを丁重に吊つてやろうとも思っているんだ……」

そう話していると、シーザーが来たのでレクシオンは何かをシーザーに命令した。するとシーザーは最初に戦っていた黒ずくめの男達の所に向かつていった。

「ジャックもシーザーの手伝いをしてくれないか？ 多分向こうのほうで骸の数は多いはずだ……シーザーは無口だから、関わりなくいとは思つが悪い奴じゃない……というか、とてもいい奴なんだ。最初は慣れないかもしれないけど頼むぞ」

「はい、分かりました」

そう言つて、ジャックはシーザーを追っかけて行つた。

「……でだ、フレッド」

話が終わったと思っていたフレッドはいきなり話しかけられたので「うえっ？」という声で返事をしてしまった。少しの後自分の出した声を思い出して恥ずかしくなってしまった。しかし、そんなことは全く気にせずにレクシオンは話を続けた。

「クロフォードというやつについてだ……先ほどの黒ずくめの男がクロフォードについて話していて、フレッドは知っているような素振りを見せていた……何か知っているなら、この俺に話してくれ……頼む」

レクシオンは頭を下げてフレッドに頼んできた。別に断る理由もない、しかし話すかどうかを決めあぐねていた。フレッド自身でも理由は分からない……しかし、フレッドの心の中で何かが起こっていたのだ。

第69話（後書き）

久しぶりなので、前回の話とちゃんと繋がっているかとても心配です。

それに加えて、キーボードもタイピングにくいものになってしまい、誤字や脱字などが見られるかもしれません。

そういう場合、は指摘していただければ嬉しいと思います。

そして、読んでくださった方々へ

本当にソロモンという作品をお読みいただきありがとうございます。この話だけの人から、最初から読んでいる人もいらっしやると思います。

もう言った方々へお礼を言いたいと思います。

本当にありがとうございます。

読者の皆様方にお手数をかけるかもしれませんが、もしよろしければ感想を書いていただけると幸いです。

感想などを読みながら、試行錯誤をして良い小説になるように努力をしています。

これからも、よろしくお願いします。

追記：近々、新小説をアップしようかと思っています。実はこんな早くP
Cが復帰するとは思って無く、新小説を書き始めた次の日にP Cが
やってきまして……

こちらでも、よろしくお願いします。

第70話

「クロフォードとは傭兵所で出会ったんです——」

そう言つて、フレッドはクロフォードについて話し始めた。少しして話を終えると、レクシオンは腕を組んで考え始めた。

少しして腕を組むのを解くとブツブツとレクシオンは何かつぶやき始めたが、その直後フレッドに話しかけてきた。

「クロフォードは敵の将だが、それが俺達の所に紛れ込んでいるということは……スパイがいっぱい潜り込んでいるということだと思う。だから、ジャン様に報告をしながらも俺たちで早く倒せるように特訓をしなければいけないんじゃないかと思っている」

そう言つと、死体を担ぎ Rond 城へと向かった。フレッドも黒ずくめの男の死体を担ぎ、レクシオンの後を追つた。

Rond 城に着いた後、死体は兵士たちに任せカイザーに今までの経緯を話し、城門の後片付けを頼みに行った。

「ああ、そういうところなら喜んで受けるよ」

カイザーは承諾すんなりと承諾し、フレッド・カイザー・ジャック・レクシオン・シーザーの五人で城門へ向かつて行き、血を拭いたり倒れたものを直したりと何も無かつたような風にして、Rond 城に帰って行つた。

Rond 城に帰るとどつと疲れが押し寄せてきた。なので自分の寝る部屋がどこにあるかを聞いて、即座に向かいベッドに倒れた。

次の朝、フレッドはレクシオンの声で目が覚めた。

「フレッド、昨日の話で特訓の話をしただろ？ 今日それをしに行くぞ」

フレッドは昨日の疲れが溜まっていたが、準備をして下に降りるとカイザーの姿があつた。

「今回は彼に手伝いをしてもらうつもりだ……昨日の話をジャン様に報告しなければならなくなつたから相手ができなくなつたので、

相談をしたら快く引き受けてきてくれた」
そう話をして、レクシオンはどこでやるかの説明を始めた。

第70話（後書き）

この次から、原本通りに書いていきます。
これからもよろしくお願いいたします。

来月で小説投稿をはじめて一年になります。
ということはこの作品も一周年。

ここまで読んでいただけて本当にうれしいと思います。
アクセスが伸びたり、お気に入り登録をされているのを見てとても
嬉しかったです。

友達からは「こんなくそ小説なんてやめちまえ」などの罵倒（？）
の声などが聞こえてくるのですが、ここまで続けて来られたのは読
者様のおかげです

本当にありがとうございます。

そして、アクセス数が14000越えたのもとてもうれしいです。
読者の皆様ありがとうございます。

これからもがんばっていくのでよろしくお願いいたします。

カロス

イ

一周年記念作品で投稿いたしました。

こちらの方も宜しければお読みいただけると嬉しいです。

<http://ncode.syosetu.com/n2246r/>

第71話（前書き）

感謝感激雨霰。

私が小説を続けていくことが出来るのは、読者の皆様のお陰です。
本当にありがとうございます m (——) m

今回は過去編です

第71話

「さて……レクシオンさんが言ってた場所はここだね……」

そう言い、フレッドは目の前にある森を見上げる。

「ここの中に特訓できる広間みたいな場所みたいなのところがあるらしいですね……」

カイザーが言葉を続ける。

「じゃあ、さっそく始めましょうか？」

そう言つて森の入り口についた瞬間、一つの像が見えた。

フレッドには見覚えがなかったのだが、どうやらカイザーは知っているようだった。

フレッドはカイザーにこの像について聞いてみる。すると、フレッドにも聞いたことのある名前が返ってきた。

「この像は……ジーク・アストロイさんの像さ」

そう言つて、カイザーは説明を始めた。

「アストロイさんは五年前の戦いの時に、セパイアで最も戦功を挙げた人物なんだ。その中で一番有名な戦いがここ、ロンド城で起こつたんだ」

フレッドはカイザーの話に聞き入っていた。

「今と同じ……バルカンとセパイアの戦いでな……バルカン軍は兵一万五千と、大量の兵器を持っていたのに対して、セパイア軍は僅か四千。兵器も無い状態だったんだ。ところで、フレッドは攻者三倍の法則というのを知っているかい？」

フレッドは黙つて首を横に振った。

「城を攻めるとき、攻城側は城に籠っている兵士の三倍の数で攻めなければ、城は攻め落とせないと言われている法則だ。まあ、今はそんなことはあまり通用しないんだ。兵器が無い攻城戦でないと意味がないからね……」

カイザーは淡々と話を続けた。「セパイア軍は敵が三倍以上の

兵力、そして大量の攻城兵器を持って城に来るという事を聞いて、驚いたものがたくさん出てきて、ロンド城内は混乱に陥った。また、守将のなかでも、徹底抗戦を主張する者や、降伏を主張する者。様々な意見や主張が飛び交っていた。その時に、まだ将になってから間もないアストロイさんが一つの策を城主に申し上げたのだ……その策とは――

――二千の兵を率いて、この森からバルカン兵の部隊に奇襲をかけて、混乱に陥れようといえ作戦であった」

フレッドは「ふんふん」と相づちを打ちながら話を聞いていた。「先ほど、徹底抗戦を主張していた者、降伏を主張していたものなど、色んな者に反対を受けた。上の者の立場だと、新入りになにかされるのが気に入らなかつたのだらう。兵数の半分を持っていき、もし裏切つたらどうするんだ……もし失敗したらどうするんだという意見が多数出てきたのだが、城主はその策を実施したのだ」

「それで……結果は？」

フレッドは恐る恐る聞いてみた。

「もちろん、成功したさ。しかもその戦いのおかげで三国の和平状態が結ばれることになったんだ。その時に、条約締結をしに行ったのもアストロイさんというわけだ」

フレッドはそれを聞き、そんなすごい人とは知らなかつたと感じ、いつか会ってみたいと思うようになってしまった。

「しかし……だ。アストロイさんは条約締結後に急死してしまつたな……だから、ここに像が建てられたという訳なんだ……戦いの神としてもしても崇められているんだ」

カイザーは像の前に立ち、手を合わせお祈りをした。

第71話（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございましたm（――）m

どうでしたでしょうか!？

ジークさんは今回で登場終了かもしれませんがよろしくお願いいたしますm（――）m

もうすぐ期末なので更新出来ないかもしれません。

申し訳ありません。

第72話（前書き）

テストが終わり、テスト返却され。

さて小説を書くころという時の地震

関東在住の私ですが、とても揺れました……すごく怖かった……

そんな、わたくしの話のことはどうでもよく。

今は、被災者がとても心配です。

小説書いている暇があるなら、何か手伝いができるならばしたいです。

しかし、私に出来る事は小説を読んでいただき、少しでも心を落ち着かせていただければと思っています……

では、第72話どうぞ

第72話

フレッドはカイザーがお祈りをしたのを見て、フレッドもお祈りをした。

「それとな、アストロイさんが戦いの神と崇められているのもう一つの理由があるんだよ」

カイザーは体勢を直し、フレッドに向かって話を続けた。

「この像にお祈りしたものは、無傷で帰ってくるということが言われているんだ。あくまで伝説だけだね」

「それじゃあ何故、今お祈りしている人がいないんでしょうか？」

その話が本当なら人がドンドン来るはずですが……」

「まあ、伝説になっているだけだ。本当にそういう効力があるかは分からんが……神の力を信じる人と信じない人に分かれるから、少ないんだろう」

そう話すと、カイザーは森の奥へと進んでいった。フレッドはその後を追っていった。

「カイザー殿……森の奥に来てどうするんでしょうか？」

「レクシオン殿から言われたとおり、ここの奥にある広場でフレッドと二人で剣の鍛錬をするんだ。今後のために備えてね」

歩きながら、フレッドとカイザーは会話していた。

「カイザー殿の剣の腕はどのくらいなのでしょう？」

「まあ、普通なぐらいですよ。私はそれほど上手くないですから」

「それならお手柔らかにお願いします」

と、いろいろと会話していると広場に着いた。

「ここが広場か……」

広場は人二千人ほどがゆうゆうと入る事が出来る広さであった。

「じゃあ、早速だけ……剣の鍛錬を開始しますか？ それとも、もうちょっと後に始めますか？ 私はどちらでもいいんですが……」

「えーと……すぐに鍛錬を始めようかな……」

そう言うつと、カイザーは一枚の紙をフレッドに渡してきた。フレッドはそれを読み始める。

「剣の構えに基礎体力付け……それに回避と防御練習か……誰が考えたんですか？ この練習メニューは」

「ああ、レクシオンさんから渡されたんだ。これをフレッドに渡してくれと頼まれたんだ。これをすればいいらしいよ」

それを聞いたフレッドは、鍛錬の準備を始めた。

第72話（後書き）

どうでしたか？

では、ここで地震の話をば……

- ・ 余震に気を付ける
- ・ 水や非常食の準備を
- ・ 一人で出歩かない
- ・ 自分で正しい情報を取捨選択する

ということを気を付けて行動してください。

災害時はラジオからの情報が一番です。

はい。この震災で今日の夜まで東北にいた友人と連絡が取れませんでした。全員の安全確認ができたのでよかったです……

第73話

少し経つと、フレッドは準備を終えたらしく剣を構えた。

「じゃあ、始めるか」

そう言つて鍛練を開始した。

そして、時は経ち数時間後。鍛練の最後の最後に差し掛かって
いた。

「ふっ…はっ…」

カイザーとフレッドは剣を打ち合っていた。

「はぁ…はぁ…」

カイザーとフレッドは既に肩で息をするほどに疲れており、顔
は汗でベトベトになっていた。

そして、剣をぶつけたその時――

「ガキン」という鈍い音が鳴り……フレッドの剣が飛んでいく
…その後…剣が欠けてしまったのである。

フレッドは欠けてしまった剣に駆け寄る。

「今までこの剣を酷く使っていたのか……」

フレッドは落ち込みながら話す。

その時、フレッドの元へカイザーが駆け寄ってきた。

「剣が折れたのか……でも、武器屋に行けば良い剣が買えるから大
丈夫だ」

そう言い、フレッドを励ます。そして言葉を続けた。

「じゃあ、終わりにして剣を買いに行こうか」

その言葉を聞き、森から出ていったのである。

次の日、フレッドの部屋の壁には欠けた剣と新しく買った剣の
両方が立て掛けてあった。

昨日武器屋に売っており、とても手に馴染んだため買ったので
ある。

「昨日は……疲れたな……」

フレッド剣を買った後、部屋に戻りすぐに寝てしまった。

「さて……今日はどうしようか……」

そう言って壁に立て掛けてあった剣を握る。

長くも細くもなく、重くも軽くもない手頃な剣。

折れた剣とほぼ同形であった。

ただそれだけだったが、使いやすいに越した事は無かったのである。

その時、ノックをする音が聞こえてきた。

ドアを開けるとそこにいたのはカイザーであった。

「どうやら、集合らしい……それで、呼びに来た」

「ああ、分かった。すぐに向かいます」

そう言っで、カイザーは行ってしまった。

数分後、フレッド達は集まり話は始まった。

「5日後に攻め入ることになった。ここがが一番の戦いになるかもしれないから準備をしておいてくれ。ということらしいです」

ジャンからの手紙の内容であった。

第74話（前書き）

更新が遅くなつてしまい誠に申し訳ありません。

言い訳にしかありませんが、弁解（言い訳）をば・・・

ルーズリーフに書いているのですが繋ぎの部分をなくしてしまいこのような結果になってしまいました・・・

ではこれからも、よろしくお願いいたします。

第74話

フレッド達は色々話し合い、一時解散することになった。

その後、フレッドがカイザーに質問した。

「何か必要なものはありますか？ さっそく今から準備に取り掛かりますが」

「その前に、ミツバから渡してくれと頼まれたものがあつたよ」

カイザーは淡々に喋りながら、フレッドに小さな袋を渡してきた。フレッドはそれを受け取り、中身を調べてみた。するとそこには、戦いの準備に関してなのか、切り傷によく効く薬が入っていた。

「ミツバが言うには、緊急になった時の為らしい。いつもは一緒に行動するのが普通だけど、バラバラになった時のためだつてミツバが言つてたね」

「それは助かりますね。後で礼を言いに行つてきます。……でも、何で直接渡さないんでしょうか？」

「そんなこと知るかよ、でも、忙しそうだったから……そのせいじゃないか？」

そのような会話をした後、自分の部屋に戻つて準備を始めた。

——もちろん、ミツバへの礼は忘れずに——

5日後、城には大多数の兵士が集まつていた。そして、集まつた将は15人を超えていた。

いったん城の中に入り、この戦いについての作戦がルドランと呼ばれた男から伝えられた。

「これから説明を始めますが、ちゃんと行動しなければ負ける可能性が上がりますのでちゃんと聞いてください」

そういい、壁に掛けてある盤を机の上に置いた。どうやら、戦場あたりの地形、起伏などを記してあるものだった。

そして、赤い石と青い石を盤の上に並べていく。

「この赤い石は敵軍の配置となると予想される場所です。そして、青い石はそれに対する自軍の配置です。戦場では相手の配置を見て変えていきますが、概ね変わりはないと思ってください」

第74話（後書き）

微妙なところで終わって誠に申し訳ないです。

更新を早くして続きを早く書けるようにしていきたいと思っています。

第75話

フレッドは自分の配置の場所を見て、場所を記憶する。

「そして、重要なことが一つ。今は城に24000人の兵がいます」
フレッドはその数を聞いて少しびくりましたが、話の続きを聞く。
「敵軍は20000人ぐらいでしょうが、他の城からの援軍が来てしまいい、圧倒的な不利に落ち込んでしまします」

赤い石を味方の青い石にぶつける。

「だから、今回は速攻で城を攻略したいと思う。ちよつと無茶な強行軍になってしまうかもしれないが、それ以上に敵に援軍が来るのが怖いから仕方ないと思っている」

フレッドは一つ疑問に思ったことがあったので聞いてみた。

「攻城戦なら、攻者三倍の法則つてのがあるんじゃないでしょうか？」

「ああ、確かに相手がどこから攻めてくるか知っていた場合なら成立するが、奇襲などの場合には成立しないんだ。敵軍が混乱する確率が高いからね。しかも、今回は敵軍は城の外で戦ってくるでしょう。だから、大丈夫でしょう」

フレッドは納得し、話の続きを聞く。

「まずジャン殿はここで5000人の兵を持って待機してください。そして……」

他の将にどんな命令を与えていく。

「そして、フレッド殿は自分で率いている兵を持ってここで戦ってください」

その後も命令を出し続けた。すべての将が立ち上がった。そして、城の外に出ていき、自分の指揮する兵を集め作戦を伝えた。

そして少し経った後、24000の兵と多数の将は城を出て戦いの場へと出て行った。

行軍すること3日ほど、すると城が見えてきた。

「あれが目標の城だ。ここからは敵の奇襲にも気をつけろよ」
そして、ゆっくりゆっくりと行軍を進めていく……

第76話

「戦闘が始まった時のために矢が打てるように準備しておけよ」

と、フレッドは兵達に命令する傍ら自分たちが進んでいく場所の場所を確認する。

「よし、もうすぐ到着だ。奇襲に気を付けておけよ」

その時、城の方向から喚声が上がった。

「戦闘が始まったのか。みんな気を引き締めろよ」

フレッドがその声を上げたと同時に前方から、敵が出てきて戦闘が始まった。

カイザーやフレッドは的確に兵へ命令を繰り返していく。そのおかげか、敵を素早く撃退したのである。

「敵を深追いするな。わざと敵が退却して引き寄せてるのかもしれないしな」

そう言い、捕えられていた敵兵を連れて来させた。

敵の姿を一人一人確認していく。その時見覚えがある顔を見かけたのである。もしかやと思い、見覚えのある敵兵を奥に連れて行かせた。フレッドもその後を追いかける。

「カイザー、ここの兵士の対応は任せた。ちょっと用事があるから奥に行く」

そういつて、先程の兵士に会いに行った。

その見覚えのある兵士とは――

「マイクじゃないか？ 君はマイクじゃないのか？」

その声に反応したのか縄で縛られている敵兵は振り返った。しかし、フレッドに見覚えがないのか顔をまた戻した。

「どうして俺だけ奥に連れて行かないやいけないんだ？」

兵士はフレッドに聞いた。

「もう一度聞く。ナルの村にいたマイクじゃないのか？」

それを聞き、敵兵は再び振り返った。

「何故それを知っているんだ？」

「それは……」

少しの沈黙の後、声を続けた。

「俺がフレッドだからだよ」

第77話

それを聞き、敵の兵士は驚いたような顔をした。

フレッドはそれを見て、周りの兵士にその兵士の縄を解かせた。

「フレッド、とても偉くなつたな」

「マイク達は無事だったのか……他の人たちは？」

「無事だ。フレッド達が出かけた直後に帝国軍に襲われて、皆と一緒に捕まっちゃったんだ。逃走路をがんばって作っただけだな」

そう話している途中でフレッドが話を遮った。

「それでだ……俺たちに力を貸してくれないか？」

そうフレッドが聞くとすぐ答えが返ってきた。

「もちろんさ」

「ところで、なぜ敵の軍に所属していたんだい？」

フレッドがそういうとマイクは顔を伏せたが、ゆっくりと答え始めた。

「ちゃんと兵としての仕事をすれば、皆を解放して、ナルの村を元通りにしてくれるって聞いたからなんだ……」

その話を聞き、フレッドはみんなが安全であることを聞き安心した。

「分かった。じゃあ、マイクはここで待機していてくれ。俺は戦況とか見てくるから」

そういつて、フレッドはカイザーの所へと戻っていった。

どうやら、強行軍で行った甲斐もあり奇襲という形で攻め入る事が出来ていた。敵の兵は奇襲を受け焦り、混乱し、おろおろと逃げ惑っていた。

「どうやら勝ちのようだね」

カイザーが隣に来て声を上げた。

「敵の兵士はどうでしたか？」

「ああ、皆降伏してくれた。もうちょっと時間がかかるかと思って

いたんだが楽しかったよ」

あれこれと話しているうちにセパイアの軍が城になだれ込むところを確認する事が出来た。

「俺たちも出発だな」

そういつて、フレッド達は城へ向かう準備を始めたのであった。

第78話

フレッド達は城に着くと、ジャンが直々に迎えに来ていた。

「フレッドご苦労だった。今日はゆつくり休んでおけ」

そういうと、ジャンはどこかへと去って行ってしまった。

フレッド達は、用意された部屋に行くと自分の武器を研いだりした後、疲れたのかすぐに眠ってしまった。

次の日、目が覚めると何かを振る音が聞こえてきたので見ると、カイザーが鍛錬用の剣を振っていた。

「フレッド殿ですか。起こしてしまつて申し訳ないです」

「いや大丈夫ですよ。お気にかまわず続けてください」

それを聞いたのか、カイザーはまた剣を振り始めた。

「ん……んうう……」

フレッドの隣でそんな声が聞こえてきたので振り向いてみる。するとジャックが目を覚ましていた。

「ジャックも起きたのか。おはよう」

フレッドは明るい声で挨拶をする。ジャックは寝ぼけているのかうにやうにやと聞き取りにくい声でしゃべった後、また寝てしまった。

「ちょっと出かけてくるよ」

そう言い、フレッドは部屋の外に出て行った。もちろん用事なんてあるわけない。カイザーの邪魔しないためである。

「さてどうするか……」

フレッドはそう言いながら城の外に出ようとした時ジャンに呼び止められた。

「ちよつとこれから作戦会議があるんだ。顔を出してくれないか？」

それを言つた後に、一息ついて言葉を続けた。

「もちろん、無理にとは言わないが……」

「大丈夫ですよ。用事があるわけでもないですし」

「助かった。では先に行つてくれないか？」

「分かりました。いつもの場所ですよね？」

いつもの場所とは大広間である。毎回どの城でも作戦はその場所で立てられていたのである。

「ああそうだ。ではまた後程」

そういつとジャンは去つてしまった。フレッドは何か大きなことが起きるんじゃないかという予感がし始めてきた。

第79話

大広間に行くと、色んな将が集まっていた。フレッドはジャンが来るのを待つ。

「皆が集まっているか？　これから、作戦会議を始める」
そういつて、作戦会議が始まった。

数時間後……

「ではこの作戦で、4日後に作戦を開始する。皆鋭気を養って最後の作戦に向かって準備してくれ」

「了解しました！」「」

将達が返事をする。そして、解散していった。

作戦会議の内容はこんな感じである。

——先程の戦いによって敵の本拠地にいる敵軍と味方軍の兵力の差が縮まったので、敵の本拠地に乗り込んで、この戦いに決着を付けるにいくらしい。出陣するのは4日後なのだがそれまでの間に敵の援軍になりそうな将を籠絡して、自軍の力に加え戦局を有利に進めていく——

という事になったのである。

「とりあえず……兵士たちに休息を与えなきゃ……しかし……」
色々と悩みながら部屋に戻っていった。

部屋に行くと、カイザー・ミツバ・ジャック・レクシオン・シーザーが集まっていた。

「フレッドか、いいところに来たな」

フレッドはカイザー達の所へ行く。

「みんなで何してたの？」

「4日後の決戦に向けて、どう兵士たちを鍛錬するか皆で相談してたんだ」

「なるほど……一応、今日は休ませてその次の2日間鍛錬させて、

残りの1日を休ませようかと思っているんだが」

「それが一番いいかな」

そういうことにまとまったのでみんなが解散していった。

第80話

そして、時は過ぎていき……

色々な部隊が城門に整列していた。ここまでの間色々な部隊の人は相当鍛錬していたらしかった。

「ミツバ……もうすぐだね……」

「うん……長かったけど、もうすぐで終わりなんだね……」

「長いようで短かったように感じる……色んな人と出会って、別れて、色んな事もあったけど楽しかったっていうか……名残惜しいっていうか……」

「でも、まずはこの戦いを終わらせてからだよね……負けちゃったら意味が無いし……」

「うんそうだね。じゃあ、他の人に会ってくるからまたあとでね」
そう言い、他の人の所へと向かっていった。

——数十分後——

「これから我々は敵の本拠地を叩きに行く。皆、私に力を貸してくれ！」

そして、手を上げる。そして、叫ぶ。

「我々に勝利を——！」

それに連なつて、大歓声が上がる。それに続いて

「みんな出発だ！遅れるなよ」

そしてジャンを先頭に城から出発した。

帝国軍の本拠地まで、どんなに早く行っても7日は掛かる。ましてや、大軍勢なのでもっとかかるかと読んでいた。

しかし、その読みが当たる前に敵軍と遭遇したのであった。

「敵の兵士の数は45000程度です。どうなさいますか？」

偵察兵がジャンに話しかける。

「そのうち籠絡に成功している部隊の兵士はどれくらいだ？」

「4000程度です。我が軍は50000いる故、あえて……」

「いや、それはこちらで話し合から大丈夫だ。とりあえず、敵と大きな戦いを始めるなと伝えてくれ。頼んだぞ」

「分かりました」

偵察兵はそう言つて、去つて行つた。

「大きな戦いの前哨戦か……」

ジャンは大きく息を吐きながらそうつぶやいた。

第81話（前書き）

一昨日は私用のため更新できず申し訳ありませんでした。

第81話

戦いは始まった。部隊を二つに分けて敵を左右から挟撃する態勢をとった。敵もそれを見て隊を二つに分けてそれぞれにあたらせていった。

フレッド達は後ろに行き、援護に回っていた。そこで、戦局の様子を見ていた。どうやらちよつと旗色が悪いらしい。

「フレッド、ちよつと前線に行つてきて援護をしてくれないか？」

「分かりました。ではいつてきます」

そういつて、フレッド達は前線へと向かつていった。

フレッド達は前線に着くと、戦闘は小競り合いがちらほら起こっているぐらい小さくなっていた。

「うーん、ちよつと負傷者が多いな」

前線に着いたフレッドは、前線の様子を見て少し驚いた。

「それで、俺たちは弓で援護していくつてか」

ジャンに言われた援護内容を思い出す。

「それは、大きな戦いが始まってからでいいか……まずは小競り合いを終わらせて一旦退かせよう……長い間戦つてるはずだしな」

そう言い、カイザーとジャックとともに戦場へ出向かせて、ミツバには負傷兵の手当てをするように伝えた。

数時間後、フレッド達は戦闘の支度を整えていた。どうやら、もうじき総攻撃を仕掛けるといふ事らしい。

「準備はちゃんとしておけよ。ここ一番で何も無いという事が起きたら危ないからな」

フレッドはみんなに伝える。

「了解です。そして、準備は終わったことを報告します」

兵士の一人が全兵士の様子を確認して報告してきた。

「よし、わかった。では戦闘開始だ！」

そう叫ぶと、全兵士から喚声が上がってきた。

第81話（後書き）

それぞれ、この「ソロモン」も最終局面を迎えています。

長かったですけど今まで見てくださり誠にありがとうございます。

残りの数回も、これまでと同じくよろしくお願いいたします

第82話

戦闘は小競り合いから始まった。それは徐々に他の場所へと伝染していき、小さな小競り合いが大きな戦闘へと変わっていったのである。

「我々の部隊は前進、そして味方の部隊を援護する。皆、ちゃんと弓で援護するんだ」

フレッドは兵達の士気を高め前進していった。

少し援護射撃をすると、弓での援護射撃に参ったのか少しほど退却していった。

「これで少し休憩できるかな……」

そうつぶやいたのもつかの間、また攻めてきた。

「どうやら、休める時は無いようだな……」

そういつて、援護射撃するように命令する。

敵は同じ過ちを二度繰り返さないようにするために、フレッド達の方へ部隊を割いてきたようだった。

味方の部隊と交戦しているが、破られるのも時間の問題のようだった。どうやら、大半の部隊を回してきているようだった。

「どうするべきか……」

そう呟きながらも、兵士たちへ命令を出していた。

「少しの兵士はこちらに向かってくる部隊に対して射撃。他の部隊はこのまま援護射撃を続行。そして、ジャン殿へ援軍の要請へ誰か向かって行ってくれ」

「はっ、了解いたしました」

兵士の一人が声を上げ、ジャンが居る部隊へと向かっていった。

戦闘は長々と続いたが、何とか持ちこたえたらしい。敵軍はまた退却していた。

「援軍はどうやら、もうちょっと後に来るらしいです」

休憩していたフレッド達に舞い降りた朗報だった。

「分かった。伝令ご苦労だった。ゆつくり休んでくれ」
そういつて、兵士を休ませた。

そして、ジャンの援軍が来たと同時に攻勢に出た。

「敵はおじけついている！攻めるなら今だ！」

フレッドは高らかに声を上げ、突撃していった。

敵はなんも抵抗せずに、あっさり退却していった。不意を突かれた形になったため退却したのか、なにか策があり退却したのかかわからないが、その場の勝利にみんな喜んでいた。

第83話

「フレッド殿、ジャン殿が呼びです。どうやら、実質は戦闘に勝利したので退却するようという感じですネ」

「分かりました。了解した旨を伝えてください」

フレッドはジャン宛の言伝を伝令に頼み、先程まで指揮を執っていた隊に向かって言い放った。

「先程の戦いでは勝利したがまだ終わってない！一度、我々はジャン殿の所に戻る。そのため、帰還の準備をしてくれ！みんなご苦労であつた」

フレッドも帰還する準備にはいった。

少し後、フレッド達は隊をまとめて帰還していった。

「フレッド殿、大役ご苦労だった」

そういつて、フレッド達を出迎えたのはジャンだった。

「フレッド殿やミツバ殿、ジャック殿、カイザー殿のおかげで戦局を有利に進める事が出来た。礼を言う」

「いや、ただ与えられた仕事をしたまでですから」

ジャンは笑いながら言う。

「謙遜なさらずともいいでしょう。今日はゆつくり休んでこれからの戦いの鋭気を養ってください」

そう言われ、フレッド達は休むために与えられたテントの中へ入っていった。

その夜……フレッド達は、戦いの疲れを癒すため、眠りについていた。

すると、ガキンガキンと剣と剣が交わる音が聞こえてきた。

「何事だ？」

そういつて、フレッド達は外に出る。

敵の夜襲だ

レクシオンに案内されて、ジャンの所に着くと、フレッド達を出迎えてくれた。

「被害はどのような感じですか？」

「ああ、8000人程の死傷者が出てしまった。だが、まだ戦えるほどの戦力はあるから……明日、もしくは明後日に攻撃を開始する」

「はい。分かりました」

そういつて、ジャンの所から出て行った。

第85話（前書き）

最近、某ポケモンBWにて、色違いのツボツボを粘っているのに夢中になりすぎて更新を遅らせてしまい申し訳ありません……

第85話

「……………また、戦うのか……………」

フレッドは小さくつぶやいた。

「……………？ フレッドどうしたの？」

ミツバが聞いてくる。

「……………ん……………何でもないよ。また戦いだね……………怪我しないように頑張ろう」

「うん……………」

ミツバは小さくつぶやいた。

奇襲された地へ向かうのは次の日のことであつた。総勢40000人の軍勢を率いて。

「今度こそ敵に戦いを挑み、そして勝利するぞ！」

ジャンは叫ぶ。その後に兵達から歓声が上がっていった。進軍していくと、敵が見えてきた。

「全員、かかれ！」

ジャンから命令が下る。

「……………おおおおお！！……………」

兵達は声を上げて敵に向かって切りかかっていった。

戦略や陣形など全く無視。ただ、兵士一人一人の結束力、そして今まで訓練していたことを思い出してくれる事に賭けたのである。

ガキン、ガキンと剣の音が鳴り響く。それに加えて兵の喚声、悲鳴、叫び声。その他にも色々な声が入り混じって聞こえてくる。
「どうなるか……………」

ジャンは心で思っていた事を誰も聞こえないほどの小さな小さな声で呟いていた。そうしないと、心が潰されるかもしれないのである。

（今までは、作戦をしっかりと練った上で戦いに挑んでいたが、無

策で挑むところも心配で潰されていきそうになるとは……)

数時間たつても、決着はついていない。しかし、着々とセパイア軍が押して行ってるのが見えてきていた。

「よしっ！これで何とかなりそうだ。誰か剣を持ってきてくれ。私自身も前線へ行き兵を鼓舞してくる」

「ですが……危険ではないのですか？」

配下の一人の将がジャンに向かって聞いてきた。

「ああ、だからフレッド殿と一緒に行くさ」

その言葉を言った後に、一息ついてまたしゃべりだした。

「レクシオンとシーザーとも一緒にな」

「はっ、それなら安心です。どうします？フレッド殿達やレクシオン殿、シーザー殿をここにお呼びいたしますか？」

「いや、大丈夫だ。私が用件を伝えてお願いをしてくる」

そういつて、ジャンは剣を持ってフレッド達の所へと向かった。

第86話

レクシオン達に出会ったジャンは一緒についてきてくれないかとお願いすると、簡単に了解を得られたのである。

「皆踏ん張りどころだ！頑張れ！」

前線に出陣したジャンは兵達に向けて大声を上げて言い放った。

「ジャン殿、私たちも前に出て戦ってきます。危険を感じましたら、どうかお引き下さい。では、行ってきます」

そう、レクシオンは言うとしーザー、フレッド、カイザー、ジャック、ミツバを連れて戦闘へ参加していった。

ジャンはレクシオン達が行ってしまった後に何故徐々にだが敵軍を押せていたのかを考え始めた。勿論周りに集中しながら。

「うん……？」

戦場に着いてみると分かった事があった。それは、敵の対応が一步一步確実に遅れている事であった。

「なるほど……そういう事だったのか」

そこでジャンは押せているのかという疑問を払拭する事が出来た。
——敵は将からの伝言を聞いてから動きを始めるがこちらは兵士だけでその行動が出来ている。だからワンテンポ早い行動が出来て、敵を抑え込む事が出来たのか——

そのようなことを考えながら戦闘を行っている方向を向いてみると、レクシオンが縦横無尽に駆け回り敵をばっさばっさと倒しているのが見え、ジャンは少し苦笑した。

「さすがレクシオン……敵をばっさばっさと倒してくれるね……」
ジャンは呟いた。その後には味方全体に命令を下す。

「今こそ敵を叩き潰すチャンスだ！全員かかれ」

その言葉を聞いた兵士は、勇んで敵に向かっていった。それに驚いたのか、敵の兵士は散り散りに逃げていき、敵軍は崩壊した。

「我々の勝利だ！みんな追撃するぞ」

ジャンは敵が逃げていくのを確認するとすかさず言い放った。しかし、兵士たちはその言葉を聞く前に我先へと敵を追撃していった。

「まあ、いいだろう。命令違反でもないからな」

ジャンは自分の思っていることを落着かせ追撃に参加していた。

第87話

追撃が終わった後、ジャンは將兵を集めこう言った。

「今回の勝利で、帝国本拠地に向けての道が開けた。皆、良く頑張ってくれた」

皆の前で頭を下げる。

「それで……だ。現在負傷した者は治療に当たってもらっている」
ここで、ジャンは一呼吸置いた。

「その者達の傷が癒えてから、本拠地へ進軍する。今までの戦いで命を落とした者……その者達に向けて冥福を祈ると同時に今度の戦いの武運を祈ってもらう……」

それを言うと同時に少しの間眼を閉じ、皆もそれに続いた。

「……よし、後は皆ゆつくり休んでくれ。いつ戦いになってもいいように準備は怠るなよ？」

そういうと皆は解散していった。

数日後、帝国軍の反撃も無く何も被害がなく帝国本拠地に進軍する準備が出来た。

「よし、皆最後の戦いだ。気合いを入れて戦えよ。この戦いに負ければ何もかも今まで頑張ってきた事全部が無駄になってしまうかもしれない。しかし、この戦いに勝てばそれで最後だ。無駄な死傷者は出したくない。だから、自分の身に危機が迫ったら逃げる！ 命を無駄にするな」

そういうと、本拠地フレブルに向かって出発した。

出発してからフレブルまでは十数日程度。しかし、帝国軍の抵抗もなくすんなりフレブルの近くまで到着した。

しかし、フレブルの門の外には帝国軍が待ち構えていた。

「私はバルカン騎士団の一人のアレンだ！ 誰でもいい！ 私と一騎打ちする者はいないのか？」

帝国軍から大きな叫び声が聞こえてくると同時に馬に乗った騎士が帝国軍から出てきた。

「それなら俺が行きます」

フレッドはジャンに戦わせてほしいと願った。しかし、

「いや、俺に行かせてくれ」

その言葉を発したのはレクシオンであった。

「フレッド達には危険な目にあわせられないな。お前らはセパイアの将だが、一時的にだ。もし、ここで一騎打ちに負けて死んだりでもしたら、村の皆に対して合わす顔がないだろ。それに生きている可能性だってある。マイクが生きてたのがその証拠だ。ま、とりあえず俺に任せておけ。勝って帰ってくるさ」

そういうと、ジャンは承諾しレクシオンはアレンと名乗った騎士のもとへ出向いて行った。

最終話（前書き）

今回で最終回となります。いつもより長いと思いますがご了承ください。

最終話

「俺はセパイア軍のレクシオン。アレンとやら、一騎打ちは俺が相手になってやる。来い！！」

そういつてレクシオンは剣を構えた。

「誰が相手でも負けない！ 行くぞ」

アレンはレクシオンに向かって行き剣を振る。早く、そして鋭い攻撃。レクシオンは避け、バックステップをし、フレッドにはかろうじて避けているように見えた。

「バルカン騎士団はこんなに強いのか……」

フレッドはつぶやく。そして、ジャックやカイザーに向かって命令する。

「レクシオンさんがやられそうになったら間に入れるようにいつでも準備をしておいてくれよ。万が一に備えてな」

「分かりました」

フレッドは二人の返事を聞き、レクシオンとアレンの一騎打ちの様子を見守る。フレッドの目の前では一進一退の攻防が行われており、レクシオンは皮一枚で避けていてフレッドはハラハラしていた。しかし……

「さすがに飽きたな」

レクシオンはアレン……いや、フレッドにも聞こえるように喋った。

「なん……だと……私が相手だとつまらないというのか」

アレンは怒った様子でしゃべり、そして剣を振るう。

「ああ、その通りだよ。お前じゃ俺の相手にならない。チャンスやる。退くなら今のうちだな。さあ、どうするんだ？」

「き……貴様ああああああああああ……」

アレンは今まで以上に鋭く、そして素早い攻撃を繰り返す。しかし……

「甘いな」

レクシオンはそう言い、剣を避けアレンの懐へ入る。「そして、剣をふるった。

「ぐっ……………」

アレンは剣を落とす、そこにドサツと倒れた。それを見たセパイア軍は一斉に攻勢へと転じて行く。フレッドやジャック、カイザー、レクシオンをそれに続いていった。アレンはセパイア軍の兵士に任せてジャンのもとに送った。

アレンがたおされたことにより、帝国兵の多くが退却、もしくは降伏してきた。それに加えセパイア軍がフレブルに侵入することが出来ていた。

「よし、俺達も中に行くぞ！」

中に入ると、帝国兵が押し寄せてきたが敵を倒していき、中央の城にいるグルトの居場所へと向かった。

「ここは通さんぞ！グルト様は渡さない！かかってこい。私はバルカン騎士団長シードだ」

それに続き、隣にいる騎士も叫ぶ。

「私はリク。バルカン騎士副団長の名に懸けグルト様はお守りする！」

二人の騎士がグルトのいる城の入り口の前で剣を抜き立ちはだかる。

「行くぞ、こちらは多数、しかし敵は二人だ。周りにいる兵士は他の奴らに任せて奴らだけ叩けば、敵は勝手に崩壊していく」

レクシオンは剣を構える。フレッドも同じく剣を構えた。

「ジャック、カイザー、ミツバ、援護は任せたからな。ちゃんと頼んだぞ」

フレッドはジャック達に援護を頼んだ後、リクに向かって切りかかっていった。

「なかなか剣の腕は立つようだな。しかし、まだ敵じゃない」

リクはバックステップをし、持っている槍でフレッドを突き刺そ

うとする。

「うおっ……と……あぶねえ」

フレッドは紙一重で回避し、距離をとる。そして、レクシオンの方向をチラッと向くとレクシオンとシールドが戦っていた。

「ここで……負けてられるか……」

再びリクに向かって剣を振る。

「同じことをやっても無駄だ！」

リクは先程と同じく、バックステップで回避する。そして反撃に移ろうとする。

「どうか……」

ジャックが弓をリクに向かって放つ。

「くっ……」

リクは無理によけようとして体勢を崩した。そこに対してカイザーとミツバが追撃をする。

「ぬう……やはり……」

かろうじて避けたリクは体勢を立て直そうとする。

「させない！」

フレッドは剣を突いた。それは、リクの太ももに刺さり、リクは倒れた。

「リクさん。降伏していただけますか？ 決着はもう着いたはずですよ。多くの人を殺したくはないんです！」

「そんな、簡単に降伏してはバルカン騎士団の名……いや、帝国軍……そして、このリクの名が恥じるだけだ！ 早く殺せ！」

「それは致しません……」

フレッドはそう言うときパイア軍の兵士にリクを連れて行かせた。そして、レクシオンの方を向くとシールドも連れて行かれるところであつた。

「よし、グルトの所へ向かうぞ！」

そういつてみんなは城を登って行った。

グルトの所まではあつけなかつたどり着いた。一度はグルトの部屋

にたどり着いたのだが居なかったため、帝国兵に居場所を聞いたところ、屋上だという事を聞きそこへ向かった。

「とうとう追いつめたぞ！グルト、観念するんだな」

レクシオンは剣を構える。

「ああ、ここから戦況の様子を見ていたがそのようだな……」

グルトの手には武器も何も持っていなかった。

「だが、しかし！王が敵の手に取られたと聞けば敵は躍起立つだろう……ならばっ！」

グルトは何か悲しそうな、そいてなにかも決めつけた目でこちらを見る。

「ここで朽ち果てる！」

そういつて、屋上から身を投げた。

「くっ……なぜ、命を大切にしない！」

レクシオンは苦い顔で言う。間を置きフレッドに向かっていった。

「ジャン様に報告だ。これ以上戦うことは無いから……」

レクシオンは急いでジャンに向かって報告。ジャンはとても、喜んだ顔をして

「よくやってくれたレクシオン。そして、フレッド達！前線と敵に報告して無駄な戦いは止めさせるから、ゆっくり休んでくれ」

ジャンはレクシオン達にねぎらいの言葉をかけると同時に兵に伝達するようにと近くの兵士にお願いした。

それにより、一時的な混乱が起こったもののすぐに戦いは終わり、オラクル諸島の戦いは終結したのであった。

数週間後——フレッド達はレクシオンやジャン、カイザー、ジャックに別れを告げナルの村にいた。勿論、村人と一緒に。

戦いの後、フレブルの中を探索していたら村人を発見する事が出来たのである。

「よかった……本当に良かった……」

見つけた事で、フレッド達の目的は終わりジャンにお願いした事

により、ナルの村に戻る事になったのであった。

「おい！ 早くしろ」

声の主はマイクであった。

「休憩するのもいいけどな、復興作業が全然進まないから……手伝えよな！」

マイクはフレッドのもとに駆け寄る。

「あ……ここは……」

そう言うときとくすと笑った。

「ああ、俺たちが最初に一騎打ちした所だ。懐かしいな……」

「じゃあ、俺が相手になってやるよ。セパイア軍にいて相当強くなつたんだろ？」

マイクが武器を構えた。

「仕方ないな……」

フレッドも武器を構える。

「じゃあ、行くぞ！」

マイクはフレッドのもとに切りかかっていった。

そう何一つ変わらない日常が戻ってきたのであった。

終

最終話（後書き）

前書きにも書いた通り、今回で最終回となります。

いままで「ソロモン」を読んでいたいただき誠にありがとうございます！

ここまで、続けられたのはこの作品を読んでいたみなさんのおかげです。本当にありがとうございます！

次回作は未定ですが、もし書く機会がありましたら読んでいただくと幸いに思います。

最後になりますが、本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5648k/>

ソロモン

2011年8月9日01時50分発行